

平成 22 年 度

入 学 者 選 拔 要 項

京 都 大 学

目 次

I 入学定員・募集方法等 -----	1
II 出願資格 -----	2
III 入学者選抜方法等 -----	3
IV 入学者選抜の実施教科・科目等 -----	6
V 個別（第2次）学力検査等実施期日・時間 -----	28
VI 外国学校出身者のための選考 -----	30
VII 障害のある入学志願者との事前相談について -----	32
VIII 入試情報開示 -----	33
IX 個人情報の取り扱いについて -----	33
参考 学部・学科紹介 -----	34
学生募集要項等の請求方法 -----	57

連 絡 先

学 部	電 話	所 在 地
総合人間学部 教務掛	075-753-6506	〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
文学部 第一教務掛	075-753-2709	〒606-8501 京都市左京区吉田本町
教育学部 教務掛	075-753-3010	
法学部 教務掛	075-753-3107	
経済学部 教務掛	075-753-3406	
工学部 教務掛	075-753-5039	
医学部 医学科 教務担当	075-753-4325	〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町
医学部人間健康科学科 教務担当	075-751-3906	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
薬学部 教務掛	075-753-4514	〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町
理学部 第二教務掛	075-753-3637	〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
農学部 第一教務掛	075-753-6012	
学生部 入試企画課	075-753-2521	〒606-8501 京都市左京区吉田本町

I 入学定員・募集方法等

1. 入学定員

学 部		入学定員	日程	募集人員		学 部	入学定員	日程	募集人員			
総合人間学部		120	前期	120	文系 65	薬科学科	50	前期	50			
					理系 55					薬学科	30	30
文 学 部		220	前期	220		計	80		80			
教育学部		60	前期	60	文系 50	地球工学科	185	前期	185			
					理系 10					建築学科	80	80
法 学 部		330	前期	330 注1		物理工学科	235		235			
経 済 学 部		240	前期	240	一般 190 注1	電気電子工学科	130	前期	130			
					論文 25					情報学科	90	90
					理系 25							
										計	955	955
理 学 部		311	前期	311								
医 学 部	医 学 科	105	前期	105		資源生物科学科	94	前期	94			
	人 間 健 康 科	看護学専攻	70	前期	70		応用生命科学科		47	47		
		検査技術専攻	37	前期	37		地域環境工学科		37	37		
		理学療法専攻	18	前期	18		食料・環境経済学科		32	32		
	学 科	作業療法専攻	18	前期	18		森林科学科		57	57		
		小 計	143	前期	143		食品生物科学科		33	33		
	計		248	前期	248		計		300	300		
									合 計			
							2,864	前期	2,864			

※後期日程試験は実施しません。

注1 外国学校出身者のための選考入学者10人以内を含みます。

注2 薬科学科は4年制，薬学科は6年制です。

2. 募集方法等

- (1) 総合人間学部，教育学部は，入学定員を前期日程の「文系」試験及び「理系」試験に分けて募集します。
- (2) 文，法，理，医(医学科)の各学部は，入学定員を前期日程試験において募集します。
- (3) 経済学部は，入学定員を前期日程の「一般」試験，「論文」試験及び「理系」試験に分けて募集します。
- (4) 医学部人間健康科学科は，入学定員を前期日程試験において専攻別に募集します。
- (5) 薬学部，工学部は，入学定員を前期日程試験において学科別に募集します。
- (6) 農学部は，入学定員を前期日程試験において学科別に募集します。なお，第1～第3志望まで学科を選択することができます。

3. 試験実施方式・日程

本学は，分離分割方式による前期日程試験で実施します。

志願者は，分離分割方式の「前期日程」の大学・学部等から1つ，「後期日程」の大学・学部等から1つの合計2つの大学・学部等に出願することができます。

II 出願資格

次のいずれかに該当する者で，平成22年度大学入試センター試験において受験を課す教科・科目（6～27ページの「入学者選抜の実施教科・科目等」中「大学入試センター試験の利用教科・科目名」欄参照）のすべてを受験した者

1. 高等学校又は中等教育学校を卒業した者及び平成22年3月卒業見込みの者
2. 通常の課程による12年の学校教育を修了した者及び平成22年3月修了見込みの者
3. 外国において，学校教育における12年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したものの（平成22年3月31日までに修了見込みの者を含む。）
4. 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程又は相当する課程を有するものとして認定又は指定した在外教育施設の当該課程を修了した者及び平成22年3月31日までに修了見込みの者
5. 文部科学大臣が指定する専修学校の高等課程を文部科学大臣が定める日以後に修了した者
6. 文部科学大臣の指定した者（昭和23年文部省告示第47号－大学入学に関し，高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者の指定－）
7. 高等学校卒業程度認定試験又は大学入学資格検定（大検）に合格した者及び平成22年3月31日までに合格見込みの者で，平成22年3月31日までに18歳に達するもの
8. 本学において，個別の入学資格審査により，高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で，平成22年3月31日までに18歳に達するもの（注：【個別入学資格審査の申請方法等】参照）

注：【個別入学資格審査の申請方法等】

1. 入学資格認定の申請対象者（上記の8.として申請する者）
平成22年度入学者選抜試験においては，学校教育法施行規則第150条第1号から第6号に該当しない相当の理由がある者であって，次に該当するものとします。
○ 外国人を対象に教育を行うことを目的として我が国に設置された教育施設において，高等学校に対応する3年に相当する学習歴を有する又は有する見込みの者。
2. 申請受理期間
(1) 平成21年7月21日（火）から9月4日（金）（必着）まで。
(2) 平成22年1月18日（月）から1月20日（水）（必着）まで。（ただし，平成22年度大学入試センター試験を受験した者に限る。）

3. 申請方法

(1) 申請書類

- ① 入学資格認定申請書（本学所定の様式）
- ② 出身教育施設の修了（又は修了見込み）証明書
- ③ 出身教育施設の規則等
- ④ 出身教育施設のカリキュラム（修業年限、授業時間数、授業科目、必要単位数等が明記されたもの）
- ⑤ 返信用封筒〔長形3号封筒120mm×235mmに申請者の住所・氏名・郵便番号を明記して、770円分（書留速達料金）の切手を貼ってください。〕

※ 以下に掲げる京都大学個別入学資格審査により入学資格認定した教育施設の修了（見込み）者は(1)申請書類の③及び④の書類については提出する必要がありません。

平成16年度承認 京都朝鮮中高級学校、東京朝鮮中高級学校

平成17年度承認 大阪朝鮮高級学校

(2) 申請書類提出先

京都大学 学生部 入試企画課（問い合わせ先等は、「8. その他」参照）

申請者は、上記申請書類を取り揃えて、入学資格認定申請受理期間の締切日までに、必ず持参又は「書留速達郵便」にて、「入学資格認定申請書類在中」と朱書し、郵送（期限内必着）してください。なお、提出された書類は、一切返却しません。

4. 審査方法

申請者から提出された入学資格認定申請書及び出身教育施設の修了（又は修了見込み）証明書等に基づき審査します。

5. 審査機関

入学試験実施委員会の審議を経て、総長が認定します。

6. 認定基準

認定の基準は、専修学校高等課程の修了者に入学資格を認める基準を準用し、各教科の修得単位数等について、原則として次に掲げる条件を満たした教育を行う施設で当該教育を修了していること、又は修了する見込みであること。

(1) 修了に必要な総単位数は、2,590単位数以上とする。

(2) 修了に必要な普通教科の総単位数は、420単位数以上とする。

普通教科は国語（日本語）、地理歴史、公民、数学、理科、外国語とする。

(3) 前項の教科以外の履修が、前項の教科と同様の成果が期待できる場合においては、その教科の履修をもって、前項の教科の一部又は全部に替えることができる。

※ 単位については、1単位数を50分とする。

7. 認定書の交付

審査の結果、入学資格認定者には、認定書を交付します。

8. その他

(1) 本学の個別入学資格審査により入学資格認定書を交付された者は、再度申請する必要はありません。

(2) 入学資格認定申請書及び申請方法等についての問い合わせや不明な点がありましたら、次のところに照会してください。

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学 学生部 入試企画課 TEL. 075-753-2521（直通）

Ⅲ 入学者選抜方法等

1. 入学者選抜は、大学入試センター試験の成績、個別（第2次）学力検査等の成績及び調査書を資料とし、総合して判定します。

学力検査等の成績判定は、大学入試センター試験の成績を6～27ページの「入学者選抜の実施教科・科目等」中「大学入試センター試験・個別（第2次）学力検査等の配点等」欄の配点に換算した上、これと個別（第2次）学力検査等の成績とを総合して行います。

なお、大学入試センター試験の成績の複数年度利用は、行いません。

2. 入学志願者が募集人員を大幅に上回り、個別（第2次）学力検査等を適切に実施することが困難な場合には、大学入試センター試験の成績等により第1段階選抜を行うことがあります。その場合は、各学部において、4ページの「入学者選抜方法等」に掲載の方法により、それぞれ第1段階選抜合格者を決定し、個別（第2次）学力検査等を行います。

3. 推薦入試、専門高校・総合学科卒業生入試、アドミッション・オフィス入試は、行いません。

4. 法学部及び経済学部は、外国学校出身者のための選考を行います。詳細は30、31ページを参照してください。

入 学 者 選 抜 方 法 等
(一般入試, 専門高校・総合学科卒業生入試, アドミッション・オフィス入試)

選 抜 方 法 等	個 別 (第 2 次) 学 力 検 査 等										専 門 高 校 ・ 総 合 学 科 卒 業 生 入 試					ア ド ミ ッ シ ョ ン ・ オ フ ィ ス 入 試	個 別 (第 2 次) 学 力 検 査 等 の 日 程	備 考 (欠 員 の 補 充 の 方 法 等)		
	学 部 学 科 名	個 別 (第 2 次) 学 力 検 査 を 課 す る	実 技 検 査 等					2 段 階 選 抜			実 技 検 査 等								募 集 人 員	
			実 技 検 査 を 課 す る	論 述 試 験 を 課 す る	面 接 を 行 う	論 文 を 課 す	外 国 語 に お け る 聞 き 取 り テ ス ト を 課 す	主 として, 調 査 書 の 内 容 と 大 学 入 試 セ ン タ ー 試 験 の 成 績 に よ り 第 1 段 階 選 抜 を 行 い, そ の 合 格 者 に つ い て 更 に 必 要 な 検 査 等 を 行 う	第 1 段 階 の 選 抜 に よ る 合 格 者 数	個 別 (第 2 次) 学 力 検 査 を 課 す る	実 技 検 査 を 課 す る	面 接 を 行 う	小 論 文 を 課 す	外 国 語 に お け る 聞 き 取 り テ ス ト を 課 す						
総 合 人 間 学 部	前 期	文 系	○	×	×	×	×	注1 ○	○	約 4.0 倍	×	×	×	×	×	×	×	28, 29 ページ の 個 別 (第 2 次) 学 力 検 査 等 実 施 期 日 ・ 時 間 参 照		
	前 期	理 系	○	×	×	×	×	注1 ○	○	約 4.0 倍	×	×	×	×	×	×	×			
文 学 部	前 期		○	×	×	×	×	○	約 3.5 倍	×	×	×	×	×	×	×				
教 育 学 部	前 期	文 系	○	×	×	×	×	○	約 3.5 倍	×	×	×	×	×	×	×	×			
	前 期	理 系	○	×	×	×	×	○	約 3.5 倍	×	×	×	×	×	×	×	×			
法 学 部	前 期		○	×	×	×	×	○	約 3.5 倍	×	×	×	×	×	×	×	×			
経 済 学 部	前 期	一 般	○	×	×	×	×	○	約 3.5 倍	×	×	×	×	×	×	×	×			
		論 文	○	×	×	×	○	×	約 3.5 倍	×										
		理 系	○	×	×	×	×	○	約 3.5 倍	×										
理 学 部	前 期		○	×	×	×	×	○	×	注2 ○	×	×	×	×	×	×	×			
医 学 部	前 期	医 学 科	○	×	×	○	×	注1 ○	○	注3 ○	×	×	×	×	×	×	×		×	
		看 護 学 専 攻	○	×	×	×	×	×	○	約 5.0 倍										×
		検 査 技 術 科 学 専 攻	○	×	×	×	×	×	○	約 5.0 倍										×
		理 学 療 法 学 専 攻	○	×	×	×	×	×	○	約 5.0 倍										×
		作 業 療 法 学 専 攻	○	×	×	×	×	×	○	約 5.0 倍										×
薬 学 部	前 期	薬 学 科	○	×	×	×	×	○	約 3.5 倍	×	×	×	×	×	×	×	×		×	
		薬 学 科	○	×	×	×	×	×	○	約 3.5 倍								×		
工 学 部	前 期		○	×	×	×	×	○	学 部 入 学 定 員 の 約 3.0 倍	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
農 学 部	前 期		○	×	×	×	×	○	学 部 入 学 定 員 の 約 3.5 倍	×	×	×	×	×	×	×	×	×		

- 注1. 外国語の科目のうち, 英語を選択した者にのみ聞き取りテストを課します。
 注2. 大学入試センター試験の5教科7科目の得点 (ただし, 英語は250点満点を200点満点に換算) の合計が900点満点中630点以上の者 (17ページ「2段階選抜について」参照)
 注3. 大学入試センター試験の5教科8科目の得点 (ただし, 英語は250点満点を200点満点に換算) の合計が1000点満点中700点以上の者のうちから募集人員の約3倍までの者 (19ページ「2段階選抜について」参照)

入 学 者 選 抜 方 法 等 (特 別 入 試)

選 抜 方 法 等	推 薦 入 試									外国学校出身者・社会人等 のための特別 入試			そ の 他 の 選 抜	備 考		
	入学定員の一部について、出身学校長の推薦に基づき、学力検査 を免除し調査書を主な資料として判定する。									推薦入						
	学 部 学 科 学 科 名	前 期	文系 理系	個別（第 2次）学 力検査を 免除し、 大学入試 センター 試験を課 する	個別（第 2次）学 力検査及 び大学入 試センタ ー試験を 免除する	実 技 検 査 等					推 薦 入 学 募 集 人 員	外 国 学 校 出 身 者			中 国 引 揚 者 等 子 女	社 会 人
						実技検 査を課 する	面 接 を行う	小論文 を課す る	外国語に おける聞 き取りテ ストを課 する	その他						
総合人間 学 部	前 期	文系 理系	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	外国学校出 身者の特別 入試につい ては30, 31 ページ参照	
文学部	前 期		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
教育学部	前 期	文系 理系	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
法学部	前 期		×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×		
経済学部	前 期	一般									○					
		論文	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
		理系										×				
理学部	前 期		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
医学部	前 期		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
薬学部	前 期		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
工学部	前 期		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
農学部	前 期		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		

IV 入学者選抜の実施教科・科目等

【総合人間学部】

◇入学定員120人(募集人員 前期日程 文系65人・理系55人)

◇前期日程:2月25日, 26日

学力検査等の区分	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等								その他の選抜方法等			
	教科	科目名等	教科	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文		面接	配点合計	
文系	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	約4.0倍	センター試験	*	*		*	100	*			100	追加合格	
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	地歴	世B, 日B, 地理Bから1													
	数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数A・数B			個別学力検査	150	100		200		200				650
	理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから1	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング(聞き取りテスト含む), 独, 仏, 中から1			計	150	100		200	100	200				750
		[5教科6科目]															
理系	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	約4.0倍	センター試験	*	100		*	*	*			100		
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C													
	数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	理	物Ⅰ・物Ⅱ, 化Ⅰ・化Ⅱ, 生Ⅰ・生Ⅱ, 地学Ⅰ・地学Ⅱから2			個別学力検査	150			200	200	150		700		
	理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから2	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング(聞き取りテスト含む), 独, 仏, 中から1			計	150	100		200	200	150		800		
		[5教科7科目]															

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

- 「理科」について, 複数の科目から選択できる場合の成績判定には, 高得点の科目より成績を用います。
- 英語のリスニングの成績については, 以下のとおり利用します。
英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用します。
また, ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行います。
なお, リスニングを欠席した場合は, リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

1. 「地理歴史」について

総合人間学部「文系」の「地理歴史」においては, 大学入試センター試験で受験しなかった「地理歴史」の科目(世界史B, 日本史B, 地理B)から選択してください。

2. 「数学」について

(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目

文系: 「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学A」, 「数学B」の4科目を併せて「数学」として出題します。

理系: 「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学Ⅲ」, 「数学A」, 「数学B」, 「数学C」の6科目を併せて「数学」として出題します。

(選択分野及び出題範囲に対する注意)

- 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし, 立体の体積も含まれます。
- 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし, 「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。

- ③ 文系の「数学A」の「場合の数と確率」は条件つき確率なども含むものとします。その内容は「数学C」「確率分布」の「確率の計算」程度とします。
- ④ 理系の「数学C」では「行列とその応用」「式と曲線」「確率分布」の3分野を出題範囲とします。ただし、「確率分布」は「確率の計算」のみを範囲とします。
- ⑤ 「数学Ⅲ」は、簡単な微分方程式及び曲線の長さを含みます。

(2) 補足説明

- ① 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても、指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は、出題範囲とします。
- ② 上記①の発展的内容、「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容、「数学Ⅲ」で出題範囲とする微分方程式と曲線の長さの内容、及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては、旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

3. 「理科」について

- (1) 物理:「物理Ⅰ」と「物理Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「物理Ⅱ」の第3部後半(原子・電子と物質)と第4部(原子構造と原子核・素粒子)において扱われている現代物理の諸項目については、現代物理の個々の事象の単なる知識を問う出題はしませんが、それらの事象を素材にして物理の基本的法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

- (2) 化学:「化学Ⅰ」と「化学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「化学Ⅱ」の第2部(生活と物質)と第3部(生命と物質)において扱われている諸項目については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして化学の基本法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

- (3) 生物:「生物Ⅰ」と「生物Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「生物Ⅱ」で扱われている内容については、出題の素材として用いることはありますが、単に知識を問うのではなく、基本的概念の理解や、生物学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題をします。

- (4) 地学:「地学Ⅰ」と「地学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「地学Ⅱ」で扱われている内容については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして地学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題はあり得ます。

4. 「外国語」について

英語を選択した者には、英語の聞き取りテストを行います。

5. 2段階選抜について

入学志願者が各選抜区分の募集人員に対して記載する倍率を上回った場合は、各選抜区分の大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、第1段階選抜を行うことがあります。

3. 「大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等」についての注意事項

大学入試センター試験で課す5教科のうち*印の付いた教科の得点は、他の教科と併せて第1段階選抜のための得点対象としますが、学力検査等の得点対象としません。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学Ⅲ→数Ⅲ, 数学A→数A, 数学B→数B, 数学C→数C

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 物理Ⅱ→物Ⅱ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 化学Ⅱ→化Ⅱ, 生物Ⅰ→生Ⅰ, 生物Ⅱ→生Ⅱ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【文学部】

◇入学定員220人(募集人員 前期日程 220人)

◇前期日程:2月25日, 26日

大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等								その他の選抜方法等		
教科	科目名等	教科	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文		面接	配点合計
国	国語	国	国語総合・現代文・古典	約 3.5倍	センター試験	50	50		50	50	50			250	追加合格
地歴	世B, 日B, 地理Bから1	地歴	世B, 日B, 地理Bから1		個別学力検査	150	100		100		150			500	
数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数A・数B		計	200	150		150	50	200			750	
理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから1	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1												
外	英, 独, 仏, 中, 韓から1														
		[5教科6科目]													

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

1. 「理科」について、複数の科目から選択できる場合の成績判定には、高得点の科目より成績を用います。

2. 英語のリスニングの成績については、以下のとおり利用します。

英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用し、学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。また、ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行い、学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。

なお、リスニングを欠席した場合は、リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

1. 「地理歴史」について

「地理歴史」においては、大学入試センター試験で受験しなかった「地理歴史」の科目(世界史B, 日本史B, 地理B)から選択してください。

2. 「数学」について

(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目

「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学A」, 「数学B」の4科目を併せて「数学」として出題します。

(選択分野及び出題範囲に対する注意)

- ① 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし、立体の体積も含みます。
- ② 「数学B」では「数列」, 「ベクトル」, 「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし, 「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。
- ③ 「数学A」の「場合の数と確率」は条件つき確率なども含むものとします。その内容は「数学C」, 「確率分布」の「確率の計算」程度とします。

(2) 補足説明

- ① 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても、指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は、出題範囲とします。
- ② 上記①の発展的内容, 「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては、旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

3. 2段階選抜について

入学志願者が募集人員に対して記載する倍率を上回った場合は、大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、第1段階選抜を行うことがあります。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学A→数A, 数学B→数B

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 生物Ⅰ→生Ⅰ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【教育学部】

◇入学定員60人(募集人員 前期日程 文系50人・理系10人)

◇前期日程:2月25日, 26日

学力検査等の区分	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等								その他の選抜方法等			
	教科	科目名等	教科	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文		面接	配点合計	
文系	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	約3.5倍	センター試験	50	25	25	50	50	50			250	追加合格	
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	地歴	世B, 日B, 地理Bから1													
	公民	現社, 倫, 政経から1	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数A・数B			個別学力検査	200	100		150		200				650
	数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1			計	250	125	25	200	50	250				900
	理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから1															
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1 [6教科7科目]															
理系	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	約3.5倍	センター試験	50	50		50	50	50			250		
	地歴	世B, 日B, 地理B } から1	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C													
	公民	現社, 倫, 政経 } から1	理	物Ⅰ・物Ⅱ, 化Ⅰ・化Ⅱ, 生Ⅰ・生Ⅱ, 地学Ⅰ・地学Ⅱから1			個別学力検査	150			200	100	200				650
	数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1			計	200	50		250	150	250				900
	理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから2															
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1 [5教科7科目]															

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

- 「地理歴史」, 「公民」及び「理科」について, 複数の科目から選択できる場合の成績判定には, 高得点の科目より成績を用います。
- 英語のリスニングの成績については, 以下のとおり利用します。
英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用し, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。また, ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行い, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。
なお, リスニングを欠席した場合は, リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

- 「地理歴史」について
教育学部「文系」の「地理歴史」においては, 大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査等の「地理歴史」で, 同じ科目を選択しても構いません。
- 「数学」について
(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目
文系: 「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学A」, 「数学B」の4科目を併せて「数学」として出題します。
理系: 「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学Ⅲ」, 「数学A」, 「数学B」, 「数学C」の6科目を併せて「数学」として出題します。

〈選択分野及び出題範囲に対する注意〉

- ① 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし、立体の体積も含みます。
- ② 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし、「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし、「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。
- ③ 文系の「数学A」の「場合の数と確率」は条件つき確率なども含むものとします。その内容は「数学C」「確率分布」の「確率の計算」程度とします。
- ④ 理系の「数学C」では「行列とその応用」「式と曲線」「確率分布」の3分野を出題範囲とします。ただし、「確率分布」は「確率の計算」のみを範囲とします。
- ⑤ 「数学Ⅲ」は、簡単な微分方程式及び曲線の長さを含みます。

(2) 補足説明

- ① 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても、指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は、出題範囲とします。
- ② 上記①の発展的内容、「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容、「数学Ⅲ」で出題範囲とする微分方程式と曲線の長さの内容、及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては、旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

3. 「理科」について

(1) 物理:「物理Ⅰ」と「物理Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「物理Ⅱ」の第3部後半(原子・電子と物質)と第4部(原子構造と原子核・素粒子)において扱われている現代物理の諸項目については、現代物理の個々の事象の単なる知識を問う出題はしませんが、それらの事象を素材にして物理の基本的法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(2) 化学:「化学Ⅰ」と「化学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「化学Ⅱ」の第2部(生活と物質)と第3部(生命と物質)において扱われている諸項目については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして化学の基本法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(3) 生物:「生物Ⅰ」と「生物Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「生物Ⅱ」で扱われている内容については、出題の素材として用いることはありますが、単に知識を問うのではなく、基本的概念の理解や、生物学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題をします。

(4) 地学:「地学Ⅰ」と「地学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「地学Ⅱ」で扱われている内容については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして地学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題はあり得ます。

4. 2段階選抜について

入学志願者が各選抜区分の募集人員に対して記載する倍率を上回った場合は、各選抜区分の大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、第1段階選抜を行うことがあります。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

現代社会→現社, 倫理→倫, 政治・経済→政経

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学Ⅲ→数Ⅲ, 数学A→数A, 数学B→数B, 数学C→数C

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 物理Ⅱ→物Ⅱ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 化学Ⅱ→化Ⅱ, 生物Ⅰ→生Ⅰ, 生物Ⅱ→生Ⅱ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【法学部】

◇入学定員330人(募集人員 前期日程330人 外国学校出身者のための選考入学者10人以内を含む。)

◇前期日程:2月25日, 26日

大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等								その他の選抜方法等		
教科	科目名等	教科	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文		面接	配点合計
国	国語	国	国語総合・現代文・古典	約 3.5倍	センター試験	50	50		50	50	50			250	外国学校 出身者 追加合格
地歴	世B, 日B, 地理Bから1	地歴	世B, 日B, 地理Bから1		個別学力検査	150	50		150		150			500	
数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数A・数B		計	200	100		200	50	200			750	
理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから1	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1												
外	英, 独, 仏, 中, 韓から1														
[5教科6科目]															

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

1. 「理科」について, 複数の科目から選択できる場合の成績判定には, 高得点の科目より成績を用います。

2. 英語のリスニングの成績については, 以下のとおり利用します。

英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用し, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。また, ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行い, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。

なお, リスニングを欠席した場合は, リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

1. 「地理歴史」について

「地理歴史」においては, 大学入試センター試験で受験しなかった「地理歴史」の科目(世界史B, 日本史B, 地理B)から選択してください。

2. 「数学」について

(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目

「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学A」, 「数学B」の4科目を併せて「数学」として出題します。

〈選択分野及び出題範囲に対する注意〉

- ① 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし, 立体の体積も含みます。
- ② 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし, 「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。
- ③ 「数学A」の「場合の数と確率」は条件つき確率なども含むものとします。その内容は「数学C」「確率分布」の「確率の計算」程度とします。

(2) 補足説明

- ① 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても, 指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は, 出題範囲とします。
- ② 上記①の発展的内容, 「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては, 旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

3. 2段階選抜について

入学志願者が募集人員に対して記載する倍率を上回った場合は、大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、第1段階選抜を行うことがあります。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学A→数A, 数学B→数B

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 生物Ⅰ→生Ⅰ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【経済学部】

◇入学定員240人(募集人員 前期日程 一般190人, 論文25人, 理系25人, その他若干名)

※「一般」は外国学校出身者のための選考入学者10人以内を含む。

◇前期日程:2月25日, 26日

学力検査等の区分	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等										その他の選抜方法等
	教科	科目名等	教科等	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	理科	数学	外国語	論文	面接	配点合計	
一般	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	約3.5倍	センター試験	50	50	50	50	50				250	外国学校出身者 外国人 追加合格
	地歴	世B, 日B, 地理B	地歴	世B, 日B, 地理Bから1		個別学力検査	150	100			150	150			550	
	公民	現社, 倫, 政経	外	英I・英II・オラコンI・オラコンII・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1		計	200	150	50	200	200				800	
論文	理	物I, 化I, 生I, 地学Iから1	国	国語総合・現代文・古典	約3.5倍	センター試験	**	**	**	**	**				0	追加合格
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1 [5教科6科目]	外	英I・英II・オラコンI・オラコンII・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1		個別学力検査	100					200	300	600		
	その他	論文	その他	論文		計	100					200	300	600		
理系	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	約3.5倍	センター試験	50	150		50	50				300	追加合格
	地歴	世B, 日B, 地理B	数	数I・数II・数III・数A・数B・数C		個別学力検査	150				300	200			650	
	公民	現社, 倫, 政経	外	英I・英II・オラコンI・オラコンII・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1		計	200	150		350	250			950		

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

- 「地理歴史」、「公民」及び「理科」について、複数の科目から選択できる場合の成績判定には、高得点の科目より成績を用います。
- 英語のリスニングの成績については、以下のとおり利用します。
英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用し、学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。また、ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行い、学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。
なお、リスニングを欠席した場合は、リスニングの得点を0点として取り扱います。
- 経済学部「理系」の大学入試センター試験における「地歴」、「公民」、「理科」の利用3科目の取扱いについて、成績判定には、得点の高い3科目を用います。ただし、「理科」は2科目までとします。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

1. 「地理歴史」について

経済学部「一般」において、大学入試センター試験で受験しなかった「地理歴史」の科目(世界史B, 日本史B, 地理B)から選択してください。特に、大学入試センター試験で「地理歴史, 公民」の両方を受験した場合においても、受験しなかった地理歴史の科目(世界史B, 日本史B, 地理B)から選択してください。

2. 「数学」について

(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目

一般: 「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学A」, 「数学B」の4科目を併せて「数学」として出題します。

理系: 「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学Ⅲ」, 「数学A」, 「数学B」, 「数学C」の6科目を併せて「数学」として出題します。

〈選択分野及び出題範囲に対する注意〉

- ① 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし、立体の体積も含まれます。
- ② 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし、「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし、「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。
- ③ 一般の「数学A」の「場合の数と確率」は条件つき確率なども含むものとします。その内容は「数学C」「確率分布」の「確率の計算」程度とします。
- ④ 理系の「数学C」では「行列とその応用」「式と曲線」「確率分布」の3分野を出題範囲とします。ただし、「確率分布」は「確率の計算」のみを範囲とします。
- ⑤ 「数学Ⅲ」は、簡単な微分方程式及び曲線の長さを含みます。

(2) 補足説明

- ① 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても、指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は、出題範囲とします。
- ② 上記①の発展的内容、「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容、「数学Ⅲ」で出題範囲とする微分方程式と曲線の長さの内容、及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては、旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

3. 「論文」について

論文試験においては、総合的な学力とともに自学自習(自分自身の思考力によって状況の分析, 課題の発見と解決, 総合的な判断などを行うこと)の能力を有する学生を選抜します。そのため、かなりの程度のまとまりをもつ文章や資料を与え、その内容を正確に読みとって設問に答えたり、根拠のある推論, 本人自身の読解力と知見に基づいた論評を加えたりすることを求めます。題材としては、現代の文章や資料だけでなく、内外の古典的文献からとったものも含まれます。

4. 2段階選抜について

入学志願者が各選抜区分の募集人員に対して記載する倍率を上回った場合は、各選抜区分の大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、第1段階選抜を行うことがあります。

3. 「大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等」についての注意事項

大学入試センター試験で課す**印の付いた教科の得点は、第1段階選抜のための得点対象としますが、学力検査等の得点対象としません。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

現代社会→現社, 倫理→倫, 政治・経済→政経

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学Ⅲ→数Ⅲ, 数学A→数A, 数学B→数B, 数学C→数C

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 物理Ⅱ→物Ⅱ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 化学Ⅱ→化Ⅱ, 生物Ⅰ→生Ⅰ, 生物Ⅱ→生Ⅱ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【理 学 部】

◇入学定員311人(募集人員 前期日程 311人)

◇前期日程:2月25日, 26日

大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等								その他の 選抜方法 等			
教科	科目名等	教科	科目名等	2段階 選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文		面接	配点 合計	
国	国語	国	国語総合・現代文・古典	センター試験の得点が630点以上【17頁2.3.参照のこと】	センター試験	**	**	**	**	**				0	追加合格	
地歴	世B, 日B, 地理B	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C		個別学力検査	100			200	200	150					650
公民	現社, 倫, 政経	理	物Ⅰ・物Ⅱ, 化Ⅰ・化Ⅱ, 生Ⅰ・生Ⅱ, 地学Ⅰ・地学Ⅱから2		計	100			200	200	150					650
数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1													
理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから2															
外	英, 独, 仏, 中, 韓から1															
[5教科7科目]																

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

- 「地理歴史」, 「公民」及び「理科」について, 複数の科目から選択できる場合の成績判定には, 高得点の科目より成績を用います。
- 英語のリスニングの成績については, 以下のとおり利用します。
英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用します。
また, ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行います。
なお, リスニングを欠席した場合は, リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

1. 「数学」について

(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目

「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学Ⅲ」, 「数学A」, 「数学B」, 「数学C」の6科目を併せて「数学」として出題します。

〈選択分野及び出題範囲に対する注意〉

- 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし, 立体の体積も含みます。
- 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし, 「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。
- 「数学C」では「行列とその応用」「式と曲線」「確率分布」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「確率分布」は「確率の計算」のみを範囲とします。
- 「数学Ⅲ」は, 簡単な微分方程式及び曲線の長さを含みます。

(2) 補足説明

- 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても, 指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は, 出題範囲とします。
- 上記①の発展的内容, 「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容, 「数学Ⅲ」で出題範囲とする微分方程式と曲線の長さの内容, 及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては, 旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

2. 「理科」について

(1) 物理: 「物理Ⅰ」と「物理Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「物理Ⅱ」の第3部後半(原子・電子と物質)と第4部(原子構造と原子核・素粒子)において扱われている現代物理の諸項目については、現代物理の個々の事象の単なる知識を問う出題はしませんが、それらの事象を素材にして物理の基本的法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(2) 化学: 「化学Ⅰ」と「化学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「化学Ⅱ」の第2部(生活と物質)と第3部(生命と物質)において扱われている諸項目については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして化学の基本法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(3) 生物: 「生物Ⅰ」と「生物Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「生物Ⅱ」で扱われている内容については、出題の素材として用いることはありますが、単に知識を問うのではなく、基本的概念の理解や、生物学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題をします。

(4) 地学: 「地学Ⅰ」と「地学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「地学Ⅱ」で扱われている内容については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして地学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題はあり得ます。

3. 2段階選抜について

理学部は、利用する大学入試センター試験5教科7科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計が900点満点中630点以上の者を第1段階選抜合格者とします。

4. その他

理学部における個別学力検査の成績の順位は、「数学」と「理科」の得点の合計を用いて30位まで定め、それ以下は「国語」、「数学」、「理科」、「外国語」の得点の合計を用いて定めます。

3. 「大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等」についての注意事項

大学入試センター試験で課す**印の付いた教科の得点は、第1段階選抜のための得点対象としますが、学力検査等の得点対象としません。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

現代社会→現社, 倫理→倫, 政治・経済→政経

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学Ⅲ→数Ⅲ, 数学A→数A, 数学B→数B, 数学C→数C

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 物理Ⅱ→物Ⅱ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 化学Ⅱ→化Ⅱ, 生物Ⅰ→生Ⅰ, 生物Ⅱ→生Ⅱ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【医学部】

◇入学定員248人(募集人員 前期日程 医学科105人, 人間健康科学科 看護学専攻70人, 検査技術科学専攻37人, 理学療法学専攻18人, 作業療法学専攻18人)

◇前期日程:2月25日, 26日, 27日 ※27日は医学科のみ実施

学科名等	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等										その他の選抜方法等	
	教科	科目名等	教科等	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文	面接	配点合計		
医学科	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	センター試験の得点が700点以上の者のうちから募集人員の約3倍までの者【19頁2.5.参照のこと】	センター試験	50	50		50	50	50			250	追加合格	
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C		個別学力検査	150			250	300	300		50	1050		
	数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	理	物Ⅰ・物Ⅱ, 化Ⅰ・化Ⅱ, 生Ⅰ・生Ⅱから2		計	200	50		300	350	350		50	1300		
	理	物Ⅰ 化Ⅰ 生Ⅰ	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング(聞き取りテスト含む), 独, 仏, 中から1													
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1	その他	面接													
		(5教科8科目)															
人間健康科学科	看護学専攻	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	各専攻ごとの募集人員の約5.0倍	センター試験	100	100		100	100	100			500	追加合格
		地歴	世B, 日B, 地理B } から1	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C		個別学力検査	100			200	200	200		700		
		公民	現社, 倫, 政経 } から1	理	生Ⅰ・生Ⅱ 物Ⅰ・物Ⅱ, 化Ⅰ・化Ⅱから1		計	200	100		300	300	300		1200		
		数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1												
	検査技術科学専攻	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1	国	国語総合・現代文・古典		センター試験	100	100		100	100	100			500	追加合格
			(5教科7科目)	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C		個別学力検査	100			200	200	200		700		
				理	物Ⅰ・物Ⅱ, 化Ⅰ・化Ⅱ, 生Ⅰ・生Ⅱから2		計	200	100		300	300	300		1200		
				外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1												
理学療法学専攻																	
作業療法学専攻																	

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

- 「地理歴史」, 「公民」及び「理科」について, 複数の科目から選択できる場合の成績判定には, 高得点の科目より成績を用います。
- 英語のリスニングの成績については, 全学科において利用します。
英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用し, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。また, ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行い, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。
なお, リスニングを欠席した場合は, リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

- 「数学」について
 - 本学個別(第2次)学力検査実施科目
「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学Ⅲ」, 「数学A」, 「数学B」, 「数学C」の6科目を併せて「数学」として出題します。
(選択分野及び出題範囲に対する注意)
 - 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし, 立体の体積も含まれます。
 - 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし, 「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。

- ③「数学C」では「行列とその応用」「式と曲線」「確率分布」の3分野を出題範囲とします。ただし、「確率分布」は「確率の計算」のみを範囲とします。
- ④「数学Ⅲ」は、簡単な微分方程式及び曲線の長さを含みます。

(2) 補足説明

- ①教科書において「発展」等として扱われている内容であっても、指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は、出題範囲とします。
- ②上記①の発展的内容、「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容、「数学Ⅲ」で出題範囲とする微分方程式と曲線の長さの内容、及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては、旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

2. 「理科」について

(1) 物理:「物理Ⅰ」と「物理Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「物理Ⅱ」の第3部後半(原子・電子と物質)と第4部(原子構造と原子核・素粒子)において扱われている現代物理の諸項目については、現代物理の個々の事象の単なる知識を問う出題はしませんが、それらの事象を素材にして物理の基本的法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(2) 化学:「化学Ⅰ」と「化学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「化学Ⅱ」の第2部(生活と物質)と第3部(生命と物質)において扱われている諸項目については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして化学の基本法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(3) 生物:「生物Ⅰ」と「生物Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「生物Ⅱ」で扱われている内容については、出題の素材として用いることはありますが、単に知識を問うのではなく、基本的概念の理解や、生物学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題をします。

3. 「外国語」について

医学科で、英語を選択した者には、英語の聞き取りテストを行います。

4. 「面接」について

医学科: 医師、医学研究者としての適性を評価します。

注記: 「医学部が望む学生像」に記載されている医師・医学研究者としての適性・人間性などについて面接と調査書で評価を行い、学科試験の成績と総合して合否を判定します。

従って、学科試験の成績の如何にかかわらず不合格となることがあります。

調査書は、面接の参考資料とする他に合否判定の評価対象にします。この際、調査書の特記事項の内容を重視します。高等学校卒業後5年以上で調査書の記載がないもの、記載内容が不明確なもの、あるいは、疑義のあるものなどは、卒業学校などから別途指定した書類の提出を求めます。

また、面接の参考資料とするため、個別(第2次)学力検査受験者全員から、履歴書・志望理由などを記載した書類(本学科所定用紙)の提出を求めます。

5. 2段階選抜について

医学科は、利用する大学入試センター試験5教科8科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計が1000点満点中700点以上の者のうちから、募集人員の約3倍までの者を総得点の順位に従って第1段階選抜の合格者とします。

人間健康科学科は、入学志願者が各選抜区分の募集人員に対して記載する倍率を上回った場合は、各選抜区分の大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、第1段階選抜を行うことがあります。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

現代社会→現社, 倫理→倫, 政治・経済→政経

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学Ⅲ→数Ⅲ, 数学A→数A, 数学B→数B, 数学C→数C

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 物理Ⅱ→物Ⅱ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 化学Ⅱ→化Ⅱ, 生物Ⅰ→生Ⅰ, 生物Ⅱ→生Ⅱ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【薬学部】

◇入学定員80人(募集人員 前期日程 薬科学科50人・その他若干名, 薬学科30人)

◇前期日程: 2月25日, 26日

学科名	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等								その他の選抜方法等		
	教科	科目名等	教科	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文		面接	配点合計
薬科学科	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	各学科ごとの募集人員の約3.5倍	センター試験	50	50		50	50	50			250	外国人(薬科学科のみ) 追加合格
	地歴	世B, 日B, 地理B	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C		個別学力検査	100			200	200	200			700	
	公民	現社, 倫, 政経	理	物Ⅰ・物Ⅱ, 化Ⅰ・化Ⅱ, 生Ⅰ・生Ⅱから2												
薬学科	数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1	計	150	50		250	250	250			950		
	理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから2														
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1														
		[5教科7科目]														

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

- 「地理歴史」, 「公民」及び「理科」について, 複数の科目から選択できる場合の成績判定には, 高得点の科目より成績を用います。
- 英語のリスニングの成績については, 全学科において利用します。
英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用し, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。また, ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行い, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。
なお, リスニングを欠席した場合は, リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

1. 「数学」について

(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目

「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学Ⅲ」, 「数学A」, 「数学B」, 「数学C」の6科目を併せて「数学」として出題します。

(選択分野及び出題範囲に対する注意)

- 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし, 立体の体積も含みます。
- 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし, 「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。
- 「数学C」では「行列とその応用」「式と曲線」「確率分布」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「確率分布」は「確率の計算」のみを範囲とします。
- 「数学Ⅲ」は, 簡単な微分方程式及び曲線の長さを含みます。

(2) 補足説明

- 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても, 指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は, 出題範囲とします。
- 上記①の発展的内容, 「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容, 「数学Ⅲ」で出題範囲とする微分方程式と曲線の長さの内容, 及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては, 旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

2. 「理科」について

(1) 物理: 「物理Ⅰ」と「物理Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「物理Ⅱ」の第3部後半(原子・電子と物質)と第4部(原子構造と原子核・素粒子)において扱われている現代物理の諸項目については、現代物理の個々の事象の単なる知識を問う出題はしませんが、それらの事象を素材にして物理の基本的法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(2) 化学: 「化学Ⅰ」と「化学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「化学Ⅱ」の第2部(生活と物質)と第3部(生命と物質)において扱われている諸項目については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして化学の基本法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(3) 生物: 「生物Ⅰ」と「生物Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「生物Ⅱ」で扱われている内容については、出題の素材として用いることはありますが、単に知識を問うのではなく、基本的概念の理解や、生物学特有のものの見方、考え方を問うような出題をします。

3. 2段階選抜について

入学志願者が各選抜区分の募集人員に対して記載する倍率を上回った場合は、各選抜区分の大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、第1段階選抜を行うことがあります。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

現代社会→現社, 倫理→倫, 政治・経済→政経

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学Ⅲ→数Ⅲ, 数学A→数A, 数学B→数B, 数学C→数C

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 物理Ⅱ→物Ⅱ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 化学Ⅱ→化Ⅱ, 生物Ⅰ→生Ⅰ, 生物Ⅱ→生Ⅱ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【工学部】

◇入学定員955人(募集人員 前期日程 地球工学科185人, 建築工学科80人, 物理工学科235人, 電気電子工学科130人, 情報工学科90人, 工業化学科235人, その他若干名)

◇前期日程:2月25日, 26日

学科名	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等										その他の選抜方法等	
	教科	科目名等	教科	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文	面接	配点合計		
地球工学科	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	学部募集人員の約3.0倍	センター試験	50	100		*	*	50			200	外国人	
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	数	数I・数II・数III・数A・数B・数C		個別学力検査	100				250	250	200			800	追加合格
	数	数I・数A 数II・数B	理	物I・物II 化I・化II, 生I・生II, 地学I・地学II } から1		計	150	100			250	250	250			1000	
	理	物I 化I, 生Iから1	外	英I・英II・オラコンI・オラコンII・ リーディング・ライティング													
	外	英															
		[5教科7科目]															
建築工学科	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	学部募集人員の約3.0倍	センター試験	50	100		*	*	50			200	外国人	
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	数	数I・数II・数III・数A・数B・数C		個別学力検査	100				250	250	200			800	追加合格
	数	数I・数A 数II・数B	理	物I・物II 化I・化II		計	150	100			250	250	250			1000	
	理	物I 化I	外	英I・英II・オラコンI・オラコンII・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1													
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1															
		[5教科7科目]															
物理工学科	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	学部募集人員の約3.0倍	センター試験	50	100		*	*	50			200	外国人	
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	数	数I・数II・数III・数A・数B・数C		個別学力検査	100				250	250	200			800	追加合格
	数	数I・数A 数II・数B	理	物I・物II 化I・化II		計	150	100			250	250	250			1000	
	理	物I 化I	外	英I・英II・オラコンI・オラコンII・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1	センター試験	**	**	**	**	**	**	**			0		
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1			個別学力検査					400	400	200			1000		
		[5教科7科目]								400	400	200			1000		
電気電子工学科	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	学部募集人員の約3.0倍	センター試験	50	100		*	*	50			200	外国人	
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	数	数I・数II・数III・数A・数B・数C		個別学力検査	100				250	250	200			800	追加合格
	数	数I・数A 数II・数B	理	物I・物II 化I・化II		計	150	100			250	250	250			1000	
	理	物I 化I	外	英I・英II・オラコンI・オラコンII・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1	センター試験	**	**	**	**	**	**	**			0		
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1			個別学力検査					400	400	200			1000		
		[5教科7科目]								400	400	200			1000		
情報工学科	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	学部募集人員の約3.0倍	センター試験	50	100		*	*	50			200	外国人	
	地歴	世B, 日B, 地理Bから1	数	数I・数II・数III・数A・数B・数C		個別学力検査	100				250	250	200			800	追加合格
	数	数I・数A 数II・数B	理	物I・物II 化I・化II, 生I・生IIから1		計	150	100			250	250	250			1000	
	理	物I 化I, 生Iから1	外	英I・英II・オラコンI・オラコンII・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1	センター試験	50	50			*	*	50			150		
	外	英, 独, 仏, 中, 韓から1			個別学力検査	100				500	150	100			850		
		[5教科7科目]								500	150	150			1000		

学科名	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等								その他の 選抜方法 等		
	教科	科目名等	教科	科目名等	2段階 選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文		面接	配点 合計
工業 化学 学科	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	学部 募集 人員 の約 3.0倍	センター試験	50	100		*	*	50			200	外国人
	地歴	世B, 日B, 地理B	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C		個別学力検査	100			250	250	200			800	追加合格
	公民	現社, 倫, 政経	理	物Ⅰ・物Ⅱ 化Ⅰ・化Ⅱ			150	100	250	250	250				1000	
	数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リー ディング・ライティング		計										
理	物Ⅰ 化Ⅰ															
外	英, 独, 仏, 中, 韓から1															
		[5教科7科目]														

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

- 「地理歴史」、「公民」及び「理科」について、複数の科目から選択できる場合の成績判定には、高得点の科目より成績を用います。
- 英語のリスニングの成績については、全学科において利用します。
英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用し、学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。また、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行い、学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。
なお、リスニングを欠席した場合は、リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

1. 「数学」について

(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目

「数学Ⅰ」、「数学Ⅱ」、「数学Ⅲ」、「数学A」、「数学B」、「数学C」の6科目を併せて「数学」として出題します。

(選択分野及び出題範囲に対する注意)

- 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし、立体の体積も含まれます。
- 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし、「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし、「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。
- 「数学C」では「行列とその応用」「式と曲線」「確率分布」の3分野を出題範囲とします。ただし、「確率分布」は「確率の計算」のみを範囲とします。
- 「数学Ⅲ」は、簡単な微分方程式及び曲線の長さを含みます。

(2) 補足説明

- 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても、指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は、出題範囲とします。
- 上記①の発展的内容、「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容、「数学Ⅲ」で出題範囲とする微分方程式と曲線の長さの内容、及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては、旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

2. 「理科」について

(1) 物理: 「物理Ⅰ」と「物理Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「物理Ⅱ」の第3部後半(原子・電子と物質)と第4部(原子構造と原子核・素粒子)において扱われている現代物理の諸項目については、現代物理の個々の事象の単なる知識を問う出題はしませんが、それらの事象を素材にして物理の基本的法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(2) 化学: 「化学Ⅰ」と「化学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「化学Ⅱ」の第2部(生活と物質)と第3部(生命と物質)において扱われている諸項目については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして化学の基本法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(3) 生物: 「生物Ⅰ」と「生物Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「生物Ⅱ」で扱われている内容については、出題の素材として用いることはありますが、単に知識を問うのではなく、基本的概念の理解や、生物学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題をします。

(4) 地学: 「地学Ⅰ」と「地学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「地学Ⅱ」で扱われている内容については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして地学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題はあり得ます。

3. 2段階選抜について

工学部では、工学部全体の志願者が工学部募集人員の約3.0倍を上回った場合、各選抜区分の大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、工学部全体の志願者で第1段階選抜を行うことがあります。

4. その他

「物理工学科」

配点Bにより24位以内にある者をまず合格者とします。この合格者を除いた受験者の中から配点Aにより合格者を決定します。

「電気電子工学科」

配点A、配点Bによる合計得点をそれぞれA得点、B得点とします。すべての受験者はA得点とB得点の2つを持ちます。B得点がA得点を上回る者については、それらの者の中でB得点で上位13位までの者に限り、B得点をその者の成績とし、それ以外のすべての者については、A得点をその者の成績とします。以上の成績により合格者を決定します。

「情報学科」

配点A、配点Bによる合計得点をそれぞれA得点、B得点とします。すべての受験者はA得点とB得点の2つを持ちます。B得点がA得点を上回る者については、それらの者の中でB得点で上位9位までの者に限り、B得点をその者の成績とし、それ以外のすべての者については、A得点をその者の成績とします。以上の成績により合格者を決定します。

3. 【大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等】についての注意事項

1. 大学入試センター試験で課す5教科のうち*印の付いた教科の得点は、他の教科と併せて第1段階選抜のための得点対象としますが、学力検査等の得点対象としません。
2. 大学入試センター試験で課す**印の付いた教科の得点は、第1段階選抜のための得点対象としますが、学力検査等の得点対象としません。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴、世界史B→世B、日本史B→日B

現代社会→現社、倫理→倫、政治・経済→政経

数学→数、数学Ⅰ→数Ⅰ、数学Ⅱ→数Ⅱ、数学Ⅲ→数Ⅲ、数学A→数A、数学B→数B、数学C→数C

理科→理、物理Ⅰ→物Ⅰ、物理Ⅱ→物Ⅱ、化学Ⅰ→化Ⅰ、化学Ⅱ→化Ⅱ、生物Ⅰ→生Ⅰ、生物Ⅱ→生Ⅱ

外国語→外、英語→英、ドイツ語→独、フランス語→仏、中国語→中、韓国語→韓、英語Ⅰ→英Ⅰ、

英語Ⅱ→英Ⅱ、オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ、オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

【農学部】

◇入学定員300人(募集人員 前期日程 資源生物科学科94人, 応用生命科学科47人, 地域環境工学科37人, 食料・環境経済学科32人, 森林科学科57人, 食品生物科学科33人, その他若干名)

◇前期日程:2月25日, 26日

	大学入試センター試験の利用教科・科目名		個別(第2次)学力検査等			大学入試センター試験・個別(第2次)学力検査等の配点等								その他の選抜方法等			
	教科	科目名等	教科	科目名等	2段階選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	論文		面接	配点合計	
全 学 科 共 通	国	国語	国	国語総合・現代文・古典	学部 募集 人員 の約 3.5倍	センター試験	100	100	50	50	50				350	外国人 追加合格	
	地歴	世B, 日B, 地理B	数	数Ⅰ・数Ⅱ・数Ⅲ・数A・数B・数C		個別学力検査	100			200	200	200					700
	公民	現社, 倫, 政経 } から1	理	物Ⅰ・物Ⅱ, 化Ⅰ・化Ⅱ, 生Ⅰ・生Ⅱ, 地学Ⅰ・地学Ⅱから2			計	200	100	250	250	250					1050
	数	数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B	外	英Ⅰ・英Ⅱ・オラコンⅠ・オラコンⅡ・リーディング・ライティング, 独, 仏, 中から1													
	理	物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから2															
外	英, 独, 仏, 中, 韓から1																
		[5教科7科目]															

1. 「大学入試センター試験の利用教科・科目名」についての注意事項

1. 「地理歴史」, 「公民」及び「理科」について, 複数の科目から選択できる場合の成績判定には, 高得点の科目より成績を用います。
2. 英語のリスニングの成績については, 以下のとおり利用します。
英語250点満点(筆記200点満点, リスニング50点満点)を第1段階選抜においては200点満点に換算して利用し, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。また, ドイツ語, フランス語, 中国語, 韓国語及びリスニング免除者は筆記200点満点で第1段階選抜を行い, 学力検査等の得点としては配点欄記載の点数に換算して利用します。
なお, リスニングを欠席した場合は, リスニングの得点を0点として取り扱います。

2. 「個別(第2次)学力検査等」についての注意事項

1. 「数学」について

(1) 本学個別(第2次)学力検査実施科目

「数学Ⅰ」, 「数学Ⅱ」, 「数学Ⅲ」, 「数学A」, 「数学B」, 「数学C」の6科目を併せて「数学」として出題します。

〈選択分野及び出題範囲に対する注意〉

- ① 「数学Ⅱ」の「微分・積分の考え」においては一般の多項式を扱うこととし, 立体の体積も含みます。
- ② 「数学B」では「数列」「ベクトル」「数値計算とコンピュータ」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「ベクトル」は直線・平面の方程式を含むものとし, 「数値計算とコンピュータ」はプログラミングを除きます。
- ③ 「数学C」では「行列とその応用」「式と曲線」「確率分布」の3分野を出題範囲とします。ただし, 「確率分布」は「確率の計算」のみを範囲とします。
- ④ 「数学Ⅲ」は, 簡単な微分方程式及び曲線の長さを含みます。

(2) 補足説明

- ① 教科書において「発展」等として扱われている内容であっても, 指導要領の趣旨を踏まえて高等学校の生徒が論理的に思考して理解できる程度の内容は, 出題範囲とします。
- ② 上記①の発展的内容, 「数学Ⅱ」の微分・積分で出題範囲とする一般の多項式や体積の内容, 「数学Ⅲ」で出題範囲とする微分方程式と曲線の長さの内容, 及び「数学B」のベクトルで出題範囲とする直線・平面の方程式の内容に関しては, 旧指導要領及び過去の指導要領(昭和57年度から平成5年度)の内容が目安となります。

2. 「理科」について

(1) 物理: 「物理Ⅰ」と「物理Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「物理Ⅱ」の第3部後半(原子・電子と物質)と第4部(原子構造と原子核・素粒子)において扱われている現代物理の諸項目については、現代物理の個々の事象の単なる知識を問う出題はしませんが、それらの事象を素材にして物理の基本的法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(2) 化学: 「化学Ⅰ」と「化学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「化学Ⅱ」の第2部(生活と物質)と第3部(生命と物質)において扱われている諸項目については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして化学の基本法則や考え方を問うことはあり得ます。従って、前記の選択項目の一つを学習しなかった受験者に対しても、選択方法による不利が生じないよう出題方法などに配慮します。

(3) 生物: 「生物Ⅰ」と「生物Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「生物Ⅱ」で扱われている内容については、出題の素材として用いることはありますが、単に知識を問うのではなく、基本的概念の理解や、生物学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題をします。

(4) 地学: 「地学Ⅰ」と「地学Ⅱ」を併せた範囲から出題します。

「地学Ⅱ」で扱われている内容については、単に知識を問う出題はしませんが、それらを素材にして地学特有のものの方の見方、考え方を問うような出題はあり得ます。

3. 2段階選抜について

農学部では、農学部全体の志願者が農学部募集人員の約3.5倍を上回った場合、大学入試センター試験に利用する教科・科目の得点(ただし、英語は250点満点を200点満点に換算)の合計により、農学部全体の志願者で第1段階選抜を行うことがあります。

4. その他

第1～第3志望まで学科を選択することができます。

※大学入試センター試験及び個別(第2次)学力検査の教科・科目名は、次のように略しています。

国語→国

地理歴史→地歴, 世界史B→世B, 日本史B→日B

現代社会→現社, 倫理→倫, 政治・経済→政経

数学→数, 数学Ⅰ→数Ⅰ, 数学Ⅱ→数Ⅱ, 数学Ⅲ→数Ⅲ, 数学A→数A, 数学B→数B, 数学C→数C

理科→理, 物理Ⅰ→物Ⅰ, 物理Ⅱ→物Ⅱ, 化学Ⅰ→化Ⅰ, 化学Ⅱ→化Ⅱ, 生物Ⅰ→生Ⅰ, 生物Ⅱ→生Ⅱ

外国語→外, 英語→英, ドイツ語→独, フランス語→仏, 中国語→中, 韓国語→韓, 英語Ⅰ→英Ⅰ,

英語Ⅱ→英Ⅱ, オーラル・コミュニケーションⅠ→オラコンⅠ, オーラル・コミュニケーションⅡ→オラコンⅡ

V 個別（第2次）学力検査等実施期日・時間

前期日程試験

日時等 学部		2月25日(木)				2月26日(金)				2月27日(土)	
		教科等	時間	教科等	時間	教科等	時間	教科等	時間	教科等	時間
総合人間 学部	文 系	国語	9時30分 ～ 11時30分	数学	13時30分 ～ 15時30分	外国語	英語	9時30分～ 11時50分	地理歴史	13時30分 ～ 15時	
					独語 仏語 中国語		9時30分～ 11時30分				
	理 系	国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語	英語	9時30分～ 11時50分	理科	13時30分 ～ 16時30分	
							独語 仏語 中国語	9時30分～ 11時30分			
文学部		国語	9時30分 ～ 11時30分	数学	13時30分 ～ 15時30分	外国語		9時30分 ～ 11時30分	地理歴史	13時30分 ～ 15時	
教育学部	文 系	国語	9時30分 ～ 11時30分	数学	13時30分 ～ 15時30分	外国語		9時30分 ～ 11時30分	地理歴史	13時30分 ～ 15時	
	理 系	国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語		9時30分 ～ 11時30分	理科 (1科目)	13時30分 ～ 15時	
法学部		国語	9時30分 ～ 11時30分	数学	13時30分 ～ 15時30分	外国語		9時30分 ～ 11時30分	地理歴史	13時30分 ～ 15時	
経済学部	一 般	国語	9時30分 ～ 11時30分	数学	13時30分 ～ 15時30分	外国語		9時30分 ～ 11時30分	地理歴史	13時30分 ～ 15時	
	論 文	国語	9時30分 ～ 11時30分	論文I	13時30分 ～ 16時30分		外国語		9時30分 ～ 11時30分	論文II	
	理 系	国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語			9時30分 ～ 11時30分		
理学部		国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語		9時30分 ～ 11時30分	理科	13時30分 ～ 16時30分	

日時等 学部		2月25日(木)				2月26日(金)				2月27日(土)	
		教科等	時間	教科等	時間	教科等	時間	教科等	時間	教科等	時間
医学部	医学科	国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語	英語 9時30分～ 11時50分 独語 9時30分～ 11時30分 中国語	理科	13時30分 ～ 16時30分	面接	9時 ～ 17時30分
	人間健康科学科	国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語	9時30分 ～ 11時30分	理科	13時30分 ～ 16時30分	/	
薬学部	国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語	9時30分 ～ 11時30分	理科	13時30分 ～ 16時30分			
工学部	国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語	9時30分 ～ 11時30分	理科	13時30分 ～ 16時30分			
農学部	国語	9時30分 ～ 11時	数学	13時30分 ～ 16時	外国語	9時30分 ～ 11時30分	理科	13時30分 ～ 16時30分			

VI 外国学校出身者のための選考

◎ 外国学校出身者のための法学部入学者の選考

経済・文化等各般にわたる国際的活動の拡大に伴い、海外に在留する日本人で現地の正規の学校や国際学校で教育を受けている者の数は飛躍的に増大しており、諸外国での教育や国際バカロレアのカリキュラムによる教育は、わが国の教育とは異なってはいっても、すぐれた成果を挙げています。

このような状況の下で、諸外国で多様な文化に接触し、外国語も修得しつつ、基礎的学力を身につけた者に入学の機会を与えることは、一般学生に対する影響や、国際的に活躍しうる有為の人材養成の必要性をも含めて、種々の観点から緊要なものとなっています。

そこで、国際化時代における大学としてのあり方を考え、外国学校出身者に対して、国籍の制限なく、一般の入学者選抜方法とは別の方法で選考を行います。

実施学部	法 学 部
募集人員	10 人 以 内
出 願 資 格	<p>次の1, 2, 3, 4のいずれかに該当する者</p> <ol style="list-style-type: none"> 外国において、学校教育における12年の課程を平成20年4月1日から平成22年3月31日までに、卒業（修了）した者及び卒業（修了）見込みの者。（注）参照 上記の12年の課程には、日本における通常の課程による学校教育の期間も含まれるが、外国において最終学年を含めて2年以上継続して学校教育を受けていることを必要とする。 なお、外国に設置されたものであっても日本の学校教育法に準拠した教育を施している学校に在学した者については、その期間を、外国において学校教育を受けたものとはみなさない。 <p>（注）1. 大学入学資格として少なくとも12年の教育課程を基本とする国において、「飛び級」等により、通算教育年数12年に満たないで卒業（修了）した者及び卒業（修了）見込みの者を含む。 2. 「外国において、学校教育における12年の課程」とは、当該外国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであることを要する。 なお、インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については、出願が認められない場合や出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので、早めに照会すること。</p> <ol style="list-style-type: none"> 外国において、スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局から国際バカロレア資格証書を平成20年4月1日から平成22年3月31日までに授与された者及び授与見込みの者で、平成22年3月31日までに18歳に達するもの。 外国において、ドイツ連邦共和国の各州で大学入学資格として認められているアビトゥア資格を平成20年4月1日から平成22年3月31日までに授与された者及び授与見込みの者で、平成22年3月31日までに18歳に達するもの。 外国において、フランス共和国で大学入学資格として認められているバカロレア資格を平成20年4月1日から平成22年3月31日までに授与された者及び授与見込みの者で、平成22年3月31日までに18歳に達するもの。
選 抜 方 法 等	<ol style="list-style-type: none"> 第1次選考…出願書類を資料として用い、第1次選考を行う。 第2次選考…第1次選考合格者に対し、論文（日本語）、面接（日本語）を課し、基礎的学力と日本語の熟達度を判定する。
出 願 期 間	平成21年10月 5日（月） から 10月15日（木）
選 抜 期 日	平成22年 2月26日（金）・ 2月27日（土）
合 格 発 表 日	平成22年 3月10日（水）
そ の 他	<p>学生募集要項等について この選考に関する募集要項は、法学部教務掛で配付します。郵送を希望する者は、受信者の住所・氏名・郵便番号を明記した返信用封筒（角形2号332mm×240mm）を同封し、受信者が日本国内に居住する場合には200円切手を返信用封筒に貼付し、受信者が外国に居住する場合には航空便書状110グラム料金相当の国際返信切手券（日本国内では、現地での購入価格に関係なく、1枚につき130円分の切手と交換される。）を同封して、「外国学校出身者出願書類請求」と朱書して下記へ申し込んでください。 なお、郵便料金については日本郵政ホームページ http://www.japanpost.jp を利用するなどして、各自で確認してください。</p> <p>京都大学法学部教務掛 〒606-8501 京都市左京区吉田本町</p>

◎ 外国学校出身者のための経済学部入学者の選考

海外で経済・文化等の活動にたずさわる邦人の数が増すとともに、その子女で諸外国において正規の学校ないし国際バカロレア制度による学校で教育を受ける者の数も飛躍的に多くなっていますが、こうした学校における教育は、わが国の制度による教育とは異なっていますが、十分に評価されるべきものです。

諸外国で学校教育を受け、日本と異なる文化に接しながら、しかも十分な基礎的学力を身につけた者に入学の機会を与えることは、国際化時代に即応した大学の役割をはたす上で必要でもあり、有用でもあります。

このため、外国学校出身者に対し、一般の入学者選抜方法とは別の方法で選考を行います。

実施学部	経済学部
募集人員	10人以内
出願資格	<p>日本国籍を有する者又は日本国の永住許可を得ている者で、保護者の海外勤務等の事情で外国の学校教育を受け、平成20年4月1日から平成22年3月31日までの間に次の基礎資格及び要件を満たす者。</p> <p>1. 基礎資格 次のいずれかに該当する者。 (1) 外国において、最終学年を含め2年以上継続して学校教育を受け、日本の学校教育に相当する12年の課程を卒業（修了）した者及び卒業（修了）見込みの者、又は外国において高等学校相当教育機関の2年間を含む3年間以上継続して学校教育を受け、日本において高等学校を卒業した者及び卒業見込みの者。 〔（注）1. 大学入学資格として、12年の教育課程を基本とする国で「飛び級」等により、通算教育年数12年に満たないで卒業（修了）した者及び卒業（修了）見込みの者も出願資格があるものと認めます。 2. 外国に設置されたもので日本の学校教育法に準拠した教育を施している学校に在学した者については、その在学期間を外国において学校教育を受けたものと認めません。〕 (2) 海外に3年間以上継続して滞在し、かつ滞在中に当該国の学校教育制度に基づく大学入学資格を取得し、18歳に達するもの。</p> <p>2. 要件 高等学校卒業時に実施される国家試験等の統一試験又はこれに準ずる試験を受験している者。 統一試験のない国等の教育制度による者は、出願前に経済学部教務掛へお問い合わせください。</p>
選抜方法等	<p>1. 第1次選考…出願書類を資料として用い、第1次選考を行う。 2. 第2次選考…第1次選考合格者に対し、小論文（日本語）、面接を課し、基礎的学力と日本語の熟達度を判定する。</p>
出願期間	平成22年 1月 5日（火） から 1月 8日（金）
選抜期日	平成22年 2月25日（木）・2月26日（金）
合格発表日	平成22年 3月 9日（火）
その他	<p>1. 併願について 本学部では、本学他学部における外国学校出身者選考試験との併願を認めないので、注意してください。</p> <p>2. 学生募集要項等について この選考に関する募集要項は、経済学部教務掛で配付します。郵送を希望する者は、受信者の住所・氏名・郵便番号を明記した返信用封筒（角形2号332mm×240mm）を同封し、受信者が日本国内に居住する場合には200円切手を返信用封筒に貼付してください。受信者が外国に居住する場合には、国々の郵便事情により返信が遅れることが考えられます。そのため国際スピード便（EMS）を利用しますので、国際スピード便のホームページ [http://www.ems-post.jp/] のEMS料金表を参照し、地域ごとによる重量300グラムの料金分の国際返信切手券を返信用として同封のうえ、「外国学校出身者出願書類請求」と朱書して下記へ申し込んでください。</p> <p style="text-align: center;">京都大学経済学部教務掛 〒606-8501 京都市左京区吉田本町</p>

Ⅶ 障害のある入学志願者との事前相談について

本学では、障害があつて受験及び修学上の特別な配慮を必要とする入学志願者のための相談を常時行っています。受験及び修学上必要な特別措置等について協議いたしますので、ご相談ください。また、進路上の相談にも応じています。

なお、相談の内容によっては対応に時間を要することもありますので、相談を希望する者は、下の様式を用いて、出願前の早い時期に、志望する学部の教務担当へ申し出てください。

特に下表に相当する障害がある者については、12月末までに申し出がなかった場合、受験上の特別措置が講じられない場合もありますので十分注意してください。下表から判断できない場合は、お問い合わせください。

区 分	障 害 の 程 度
視 覚 障 害	・両眼の視力がおおむね0.3未満のもの又は視力以外の視機能障害が高度のもののうち、拡大鏡等の使用によつても通常の文字、図形等の視覚による認識が不可能又は著しく困難な程度のもの
聴 覚 障 害	・両耳の聴力レベルがおおむね60デシベル以上のものうち、補聴器等の使用によつても通常の話声を解することが不可能又は著しく困難な程度のもの
肢体不自由	・肢体不自由の状態が補装具の使用によつても歩行、筆記等日常生活における基本的な動作が不可能又は困難な程度のもの ・肢体不自由の状態が上記に掲げる程度に達しないものうち、常時の医学的観察指導を必要とする程度のもの
病 弱	・慢性の呼吸器疾患、肝臓疾患及び神経疾患、悪性新生物その他の疾患の状態が継続して医療又は生活規制を必要とする程度のもの ・身体虚弱の状態が継続して生活規制を必要とする程度のもの

○申出様式

(様式) A4判縦 京都大学〇〇学部長 殿	平成 年 月 日
	ふりがな 氏 名 生年月日 性 別 住 所 〒 電話番号 出身学校名
京都大学〇〇学部に入学を志願したいので、下記のとおり事前に相談を申し出ます。	
記	
1. 志望する学部・学科，受験日程，受験科目 2. 障害の種類，程度 3. 受験上希望する特別措置 4. 修学上希望する特別措置 5. その他 6. 添付書類 <ul style="list-style-type: none"> ・医師の診断書 ・大学入試センター試験受験特別措置決定通知書（写）（大学入試センターに申請し通知書が手元にある者） ・身体障害者手帳（写）（交付を受けている者） ・その他相談する際に必要と思われる参考資料 	

Ⅷ 入試情報開示

【試験成績】

本学では受験者本人より開示請求があれば、平成22年度入試の個人の試験成績を郵便により送付します。

開示する試験成績は、大学入試センター試験と個別（第2次）学力検査等の教科別の得点（配点換算前及び換算後）及び総点です。

【調査書】

本学では受験者本人より開示請求があれば、平成22年度入試の調査書を閲覧により開示します。

開示する調査書の内容は、不開示情報（「指導上参考となる諸事項」及び「備考」欄）を除いた部分とします。

Ⅷ 個人情報の取り扱いについて

1. 個人情報については、「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」及び「京都大学における個人情報の保護に関する規程」に基づいて取り扱います。
2. 出願に当たってお知らせいただいた氏名、住所その他の個人情報については、①入学者選抜（出願処理、選抜実施）、②合格者発表、③入学手続業務を行うために利用します。
3. 入学者選抜に用いた試験成績は、今後の入学者選抜方法の検討資料の作成のために利用します。
4. 上記2. 及び3. の各種業務での利用に当たっては、一部の業務を本学より当該業務の委託を受けた業者（以下、「受託業者」という。）において行うことがあります。
つきましては、受託業者に対して、委託した業務を遂行するために必要となる限度で、お知らせいただいた個人情報の全部又は一部を提供します。
5. 国公立大学の分離分割方式による合格及び追加合格決定業務を円滑に行うため、氏名、受験番号、大学入試センターの受験番号、合否及び入学手続に関する個人情報を、独立行政法人大学入試センター及び併願先の国公立大学に送付します。
6. 出願に当たってお知らせいただいた個人情報は、入学者のみ①教務関係（学籍管理、修学指導等）、②学生支援関係（健康管理、就職支援、授業料免除・奨学金申請等）、③授業料徴収に関する業務を行うために利用します。

【学部・学科紹介】

総合人間学部

(1) 学部設立の基本理念

本学部は、平成4年10月1日に法令上設置され平成5年4月に第一期生を迎え入れた、京都大学で最も新しい学部です。

新学部を「総合人間学部」と名付けた理由は、本学部の研究・教育が、自然と調和した人間の全体的形成を目標とするものだからです。「総合人間学」とは、心理や思想といった内面、あるいは身体面からだけでなく、政治・経済・文化・歴史といった社会環境、さらには物質や生物などの自然環境との関係を含めて、人間存在のあらゆる面に光を当てようとする学問です。すなわち、人間と人間をとりまく世界を総体的に捉える新たな学問の確立が、総合人間学部に与えられた課題なのです。

現代社会の危機感の中にあるわれわれは、人間自身を最大のテーマとして取り上げます。そうしてこそ初めて人類生存や文明の可能性が求められるからです。このような根本的な問題の追究は、従来のように高度に専門化された研究だけでは不可能でしょう。京都大学の自由な学風と伝統のもとに、既存の個別科学の枠を越えた、より多様で総合的な学問の場を提供することを、本学部はめざしています。

総合人間学部は、大学院人間・環境学研究科に直結する学部として構成されています。専攻分野の細分化を避けて、時代の要請に適應できる1学部1学科制をとり、総合人間学科の下に、人間科学系、認知情報学系、国際文明学系、文化環境学系、自然科学系の5学系の構成としました。

5学系全体で120名の入学生は、最初の1年間ほどの学系にも属しません。そして、自由に広い学問分野に触れた上で、2年進級時に自らの学系・主専攻を選択します。その際、「文系」または「理系」のいずれの入学試験を経たかは問われません。また広い視野を持つ創造性豊かな人間を育成する目的で、本学部は副専攻の制度を設けています。これは各自の主専攻の他に、異なる学問分野を系統的に履修することによって、幅広い専門知識を身につける制度です。副専攻を選択し、所定の単位を修得した場合は、卒業の際に、学士の学位記とは別に主専攻・副専攻を明記した専攻認定書が発行されます。

(2) 総合人間学部が望む学生像

本学部の基本理念に共鳴し、積極的に総合人間学の開拓を志す学生、また文系・理系の既成の枠に縛られることなく、多様化する21世紀国際社会のリーダーたらしめる学生、未知の分野・未踏の地を恐れず限りない好奇心をもてる学生、学を究めるうえでその先に見えてくる新たな地平に無上の悦びを感じることでできる学生、本学部はそういう学生が門をたたくことを望んでいます。

(3) 各学系の概要と教育内容

人間科学系

科学技術の加速度的進展や情報化といわれる社会過程の高度な発展に伴って、人間をめぐる社会的・物理的環境は過去数十年の間に著しく変化しました。その変化に対応するかのようには、既存の人間に対する知では十分説明しきれないような、さまざまな人間行動や社会現象が生起するに至っています。本学系は、人間をめぐるこうした現代的状況を背景にし、また諸科学において貯えられてきた人間についての知を前提にしながら、人間についての全体的で根底的な理解の獲得を目的としています。この目的を実現していくための道筋としては三つのものが考えられます。第一は、人間の諸活動の成果をもとに人間そのものについての思索を深化させていくという方向であり、第二は、人間を徹底して社会的文脈の中に置き、その中で人間についての知見を貯えていくという方向、そして第三は、文学を含む文化現象全般から人間についての理解に迫るという方向です。第一の方向は「思想」研究の方向と名づけるべきものであり、そこからは哲学や倫理学の伝統を前提にした人間存在についての思想的解明、あるいは造形芸術や演劇などの人間の創造行為全般についての思想的・歴史的研究がなされます。

また第二の「社会」研究の方向からは、人間形成の諸過程・諸問題に関する実証的・理論的解明、あるいは人間の社会行動についての実証的・理論的研究が行われます。そして第三の「文化」研究の方向からは、文学作品を中心とした表現文化についての研究、さらには歴史学と社会学を踏まえた文化・文学・映画研究が行われます。「思想」「社会」「文化」の三つの方向は相互に有機的に連関し合って、「人間についての全体的で根底的な理解」という本学系の目的の実現をめざします。

抽象度の高い思考（「思想」）と社会的現実についての冷静な分析（「社会」）、それに文学を含む諸文化現象への幅広い教養（「文化」）という三極構成の問題空間を系統的に学ぶことによって、人間についての深い洞察と理解をもった、これまでにないタイプの人材が輩出することが期待されます。こうした人材は、大学院、各種シンクタンク、教育界、公務員、家庭裁判所調査官、マスコミ関係、流通・広告業界など広い範囲で活躍することが予想されます。

認知情報学系

脳・身体・言語・数理情報などに関する研究を通じて、人間および計算機の多様な創造世界に関する理解を深めることを目標とします。また、運動医学や代謝栄養学の立場から、身体運動が肥満や生活習慣病の予防、治療に果たす役割やその生理学的機序に関する基礎研究をもとに、適切な食生活や運動習慣の逸脱と遺伝的要因により発症する生活習慣病のメカニズムを探究します。人間同士あるいは人間と環境との関わりは、脳、身体、言語等をインターフェースとして行われます。環境の認識と環境への働きかけは、脳内の認知機構と運動制御機構の発現によって実現されるのです。人間相互のコミュニケーションは、脳が構築した言語システムを媒体としており、それを媒介する計算機の情報処理には、情報処理の複雑な数理機構が関与しています。また脳の知的作業の最も昇華された世界が、数学的認識であるということが出来ます。

本学系は、(1) ハードウェアおよびソフトウェアとしての脳の機能を、行動学的・認知科学的・神経科学的手法を用いて解明し、人間の知性と創造性の基本原理を理解すること、(2) 高度な機械文明の発達による超運動不足やエネルギー摂取・消費のアンバランスや偏った食生活と遺伝的素因により発症する生活習慣病の生理学的・病理学的・運動科学的メカニズムを探究し、予防医学の発展に寄与すること、(3) 我々の認識を反映している自然言語・人工言語の構造と機能、生成と理解のプロセスを明らかにし、自然言語や形式言語のメカニズムとその背後の認知のメカニズムを解明すること、およびこれらの知見に基づき外国語習得のメカニズムの解明と外国語教育法を開発すること、(4) 計算機における情報の伝送・蓄積、制御や処理の過程を解析し情報処理の理論と機能を考究すること、(5) 種々の現象の数学的モデルを構築し、それを数理科学の手法を用いて解析し、我々をとりまく世界の認識を深めることをめざしています。

人間の健康や脳の機能から、人間の認知、行動発現、言語機能の探究、そして、その基礎となる運動・代謝栄養医学、情報科学や数理科学にいたるまで、総合的に学ぶことを目標とします。従来の理系・文系という枠を越えた幅広い探究能力と、人間の認知行動の総合的理解に基づく科学的で柔軟な思考能力を身につけることにより、どのような職種に就いても、的確なリーダーシップを発揮するでしょう。

国際文明学系

西欧において発展した近代主義は、政治参加の大幅な拡大、経済的な繁栄、情報の利便化、そして世界の一体化などをもたらしました。その反面、例えば市場競争の文化・生活構造および人間の感性や価値観に対する影響、グローバル化と地方文化・生活文化との矛盾、そして深刻な環境問題など、複数の領域に及ぶ諸問題を生み出しています。

本学系では、近代主義について多面的な検討を加えることを念頭に、その現状に対して、政治論・経済論・法律論・社会論・科学論・メディア論・環境論などを領域横断的に関連させた分析を加えます。そして西洋史を通して、その歴史的背景を追求し、欧米文化の研究によって、近代主義の文化的表現の解明をめざします。また日本史を通して、近代主義受容以前の独自の歴史・文化を分析するとともに、いち早く近代化した日本のあり方を検討します。さらに、東アジア文化との対照を行うことで、近代主義の相対化をめざします。これらを通して、近代主義が生み出した諸問題を解決するにふさわしい、国際的で新たな文明の理念を構築することが、本学系の

目的です。

学生は、現代社会に関する社会科学系諸分野と、日本・東洋・西洋の歴史・文化に関する諸分野の知識・方法を総合的に修得することによって、既存の文系諸学部とは異なる学際的な教養と柔軟な思考の獲得をめざします。総合的な社会科学的思考方法を身につけた人材は、新しい学際的な研究分野を開拓しようとする大学院への進学や、民間企業をはじめ官庁・自治体、出版界、中・高教員、学芸員など、多彩な方面で求められるでしょう。

文化環境学系

世界の各地では長い歴史の過程の中で、地域特有の自然環境に影響を受けるとともに、特定の言語・宗教や社会・経済などの諸条件のもとに、固有の民族性や地域性が育まれてきました。これに加えて、とくに16世紀以降、非西欧世界の諸文明は、世界化しようとする西欧文明との衝突と受容を通して、みずからの地域文明の特性を維持しながらも、伝統文化の苦悩に満ちた消長を経験してきました。

本学系は、近代文明のグローバル化が進展する現代にあって、各文明の地域的特性を多角的に比較しつつ、文明相互の交流とその文化的所産、さらには文明の自己相対化の諸相を、複眼的な視点から解明することをめざします。

学生は、世界の諸文明の特質を比較対照しつつ、それらを相対化して捉える習慣を身につけます。同時に、文明社会の基層単位をなす世界各地固有の民族性や地域性、人間社会にとって基本的な居住の諸相の実態と将来的な意義についても理解を深めます。人間社会に対する基本的な理解とグローバルな視点を持ち、諸文明の交流を通時的かつ共時的に把握して、その交流現場に係りうる包摂的能力を備えた学生は、ジャーナリズム・メディア関連、地域計画関連、国際機関、図書館、博物館、官公庁、商社などの社会における主導的職種、あるいは複数の専門領域に通ずる学際性豊かな教育研究職にふさわしい人材となるでしょう。

自然科学系

階層構造をなす自然を理解し、自然と人間との共生関係を探究するためには、一見多様で複雑に見える地球環境や物質の構造・性質、そしてヒトを含めた生物・生命現象を物理科学、物質科学、生物科学、地球科学的手法を用いて調べ、それらの成り立ちや物性・機能、そして変遷を明らかにすることが必要となります。さらに、その中に潜みそれらを支配している要因・基本原理を見だし、お互いの相関関係を論理的、統一的に把握することが重要です。

本学系では、(1) 物質の持つ基本的性質を原子、分子、電子およびその集合体のレベルから理解し、それらの織りなす多様な物性現象やエネルギー形態を解明するとともに、それらの知識が今日の科学技術の発展の基礎となってきたことを理解し、物理科学の新しい展開の方向を探究すること、(2) 様々な無機および有機物質と生体との相関を解明し、それらの機能と微視的構造を明らかにするとともに、化学反応の仕組みや制御法を研究して、優れた機能を持つ材料や目的物質を環境負荷なく創製するための基礎を養うこと、(3) DNAレベルから生態系レベルまで、各階層の生命現象と生物の機能をさぐり、また生物の多様性と進化並びに様々な種間関係とそれらが織りなす生態系の仕組みを探究すること、(4) 自然界の種々の元素や化合物の分布と循環・動態を解明するとともに、宇宙の誕生から地球46億年の歴史を振り返り、地球環境の変遷とその仕組みを解明すること、さらに学系全体として、自然界の森羅万象を対象として、それらを統一的に理解することを目標とします。

学生は、自然科学の諸分野の基礎を系統的に学修するとともに、他の学系と連携して人間と自然との共生関係を探究するための総合的な自然観と物質観を養うことをめざします。これらの学修を通して、環境問題などの総合科学に携わることのできる研究者や、科学行政官、科学ジャーナリスト、理科教育者等に要請される素養を身につけることができます。また、いずれかの専門を修める場合にも、既成の個別分野にとらわれない非境界的・流動的な新しい領域を開拓できる能力を培うことが期待されます。

文学部

(1) 文学部が望む学生像

文学部における教育は、人文学の名のもとに、思想、言語、文学、歴史、行動、さらに現代文化にかかわって展開されてきた諸学の成果を学生に教授し、共に学び考えながら、新たな知的価値を創出することをめざしてなされるものです。そこでの活動には、単に文系の範疇に含まれるものだけではなく、高度な数学的方法や実験的手法、また情報処理の技術を必要とするものもあります。文学部は、人文学の諸学問に関して、こうした幅広い能力を具え、かつ深い教養と倫理性にも優れた人材を育成することをめざしています。そのために求められる学生は、過去から、現在に至り、さらに未来にまで伸びる人類の営みについて、様々な角度から関心を寄せ、柔軟な思考力によって問題を発見し、その解決のために、論理的に、また歴史的に、創造性豊かな考察を展開することのできる能力をもつ者であることが望まれます。

文学部では、以上の理由から、センター試験によっては、総合的な基礎学力を学生が有することを求め、さらに個別学力試験では、国語、外国語、地理・歴史とならんで数学を課すことによって、思考力の柔軟性と論理性を問うことにしています。

(2) 文学部の教育内容

本学部は、明治39年(1906)9月、文科大学として創設、大正8年(1919)2月文学部と称されることになりました。文科大学開設の年、哲学科が、翌40年(1907)9月史学科、さらにその翌41年(1908)9月に文学科が設置され、45年(1912)5月までに当初の教育研究体制がほぼ整備されました。それ以後、時代の要求に応じて講座の拡充が行われてきましたが、平成4年(1992)4月より新たに文化行動学科が設置され、4学科、44講座、30専攻となりました。平成7年(1995)4月から4学科を廃止し、新たに人文学科1学科が設置されました。

人文学科設置にあたっては近年の人文科学のめざましい発展に即応するとともに、現在人類が共通にもつ様々な特性や、共通に抱える思想的、倫理的、文化的、科学的課題を基礎においた新しい人文学の構築を目指しました。この目的に沿って、より広い学問的視野に対応した哲学基礎文化学系、東洋文化学系、西洋文化学系、歴史基礎文化学系、行動・環境文化学系、基礎現代文化学系の6系と、その中に従来の特攻に相当する32の専修学問分野が設置されています。

志願者が入学前に専修の志望を決定することは難しいと思われまので、2回生でそれぞれの系に、次いで3回生からは各専修に分属します。各専修とも人間社会についての深い知識と理解を必要とすることから、語学はもちろん、諸学を広く勉学することが望まれます。3・4回生時は、本格的専門教育を行います。少人数の専門教育が原典に即して行われる場合が多くなります。また、各専修における高度の専門教育と並んで、人文学全体に対するより広い視野を養うため、それぞれの系を単位とした共通の講義も開講されます。卒業に際しては、演習指導をもとにして卒業論文を作成することが必要です。

卒業後の進路は、大学院へ進学する者のほか、教育関係、新聞社、放送局、出版社、官公庁、図書館、博物館、情報関係等、多方面にわたっています。

教育学部

(1) 教育学部が望む学生像

20世紀は教育が学校中心に機能した学校教育社会でした。しかし、21世紀は学校だけでなく、社会のさまざまな場所と一人ひとりの人生のさまざまな局面とにおいて、人間形成の営みがゆるやかにネットワーク化される「人間形成社会」が出現すると予想されます。これからの教育学は、この「人間形成社会」の展開過程で必要になる、新しい種類の〈教育〉を創造するという課題に取り組まなければなりません。

そのため、教育学部では、教育と人間にかかわる多様な事象を対象とした諸科学を学ぶことで、心と人間と社会についての専門的な識見を養成し、さらに広い視野と異質なものへの理解、そして多面的で総合的な思考力と

批判的な判断力を形成し、人間らしさを擁護し促進する態度を啓培することによって、新しい種類の〈教育〉を創造し、地球社会の調和ある共存に貢献できる人材の育成を目的としています。このような人材を育成するために、教育学部では、心と人間と社会について深い洞察力をもち、柔軟な思考と豊かな想像力に富む学生を求めています。

教育学部では、平成20年度までに既に3,000名を超える卒業生を送り出しており、卒業後の進路は、公私立学校、福祉関係、官公庁をはじめ製造業・金融保険業・商社等の一般企業や、新聞社・出版社・放送界等ジャーナリズム関係など多岐にわたっています。また、約3分の1の学生は、より高度な専門知識を身につけるため大学院に進学しています。

(2) 教育学部の教育内容

教育学部は、戦後の学制改革に伴う新制大学の発足と同時に創設され、それ以来幾多の変遷を経て、平成10年度から教育科学科1学科に再編成されました。これは、教育の総合的理解が必要な学部段階では、教育に関する諸科学の修得に重点を置いた幅広い基礎教育を重視し、ゆるやかに専門的分化を図ることを目的としたものです。

現在、教育科学科では、従来の講座制を廃止し、より大きなまとまりである「系」制（現代教育基礎学系・教育心理学系・相関教育システム論系）を導入しています。学生は、入学当初は所属する「系」を特定せず各自が学習を進め、3回生進学時に各「系」に分属します。分属については、2回生後期に分属オリエンテーションを開き、希望調査により指定科目の単位修得状況等を基に、調整し決定します。

大学院では、平成10年度から教育科学専攻及び臨床教育学専攻の2専攻に改組され、より充実した組織となりました。

法 学 部

(1) 法学部が望む学生像

21世紀に入り、世界も日本も大きな転換期を迎えており、それに伴い様々な問題が生じています。こうした状況に対応して、世界の中での国家や社会のあり方を考え、これからの豊かな人間社会を構築していくためには、人間・社会・歴史に対する深い洞察力を基礎として、法律と政治の仕組みに関する専門的な知識を備え、社会全体を視野に入れながらそれらを組み合わせる構想力を有し、国家・社会についての制度設計や組織運営に指導的にかかわっていくことのできる人材の育成が不可欠となります。また、地球規模での交流が活発となっている今日、文化の多様性を尊重し、グローバルな視点のもとで法と政治、経済、社会の問題を捉え、人々の協調する平和な社会の実現に貢献できる国際感覚あふれた教養人が求められています。

法学部は、こうした能力を備えた人材を育成するために、法学・政治学の基礎的・原理的知識を提供するとともに、国際感覚を養い、現代社会にふさわしい総合的な知見を修得させることを、教育目標としています。

このような目標のもと、法学部では、世界・国家・社会の様々な問題に対する強い関心を持ち、多方面にわたる学力、とりわけ社会科学に関する基礎的な学力を備え、論理的思考力にすぐれた学生を求めています。

本学部の卒業生は、裁判官、弁護士、検事、研究者、国家・地方公務員、国際機関職員として、また、金融機関、商社、マスコミ関係など、多方面で活躍しています。平成16年度からは法科大学院（いわゆるロースクール）制度が発足し、法学部を卒業して法科大学院に入学し、法曹への道を歩む人も多く出ています。

(2) 法学部の教育内容

法学部の専門教育には、学科制やコース制を設けず、専門科目の履修についても必修科目を設けていないところに、特徴があります。これは、学生の自主性を尊重し、みずから問題を発見し、みずから学ぶ姿勢を重視しているからです。授業は、短期に集中した学習ができるよう、原則として半年で完結する前期・後期制のもとでおこなわれています。また、法学・政治学を体系的・段階的に学ぶための指針として、入門科目である1回生配当科

目、2・3回生担当科目、2・3・4回生担当科目および3・4回生担当科目を示し、4年一貫の学年配当を実施しています。そのうえで、各学期において登録できる専門科目の単位数に上限を設けることで（いわゆるキャップ制）、学生に対して専門科目についての堅実な学習を促しています。

講義は、毎年必ず実施される基本的科目に加えて、年度ごとに種々の特別講義を開講し、社会の変動に伴って生じる新しい法現象・政治現象に積極的に対応しています。また、個々の学生がそれぞれの関心に沿って隣接科学と連携した学習を深めることができるよう、法や政治とかかわりの深い経済学部の科目は相当数を受講できるようにしているほか、その他の学部の科目も、必要な要件を充たせば卒業単位数に算入することを認めています。

また、法学部では、外国語の専門書に親しむ機会を提供し、基礎的な読解能力を養うため、教養科目の英語において、2回生について法学政治学英語を必修科目とし、また専門科目においても、英語・フランス語・ドイツ語の外国文献研究（任意選択）を3回生以上に配当しています。

さらに、法学部では、少人数教育を重視する視点から、学生の報告と討論を中心に進められる科目として、「演習」（ゼミナール）を設け、その履修を3・4回生の時に4単位まで認めています。演習科目は、法学・政治学の多様な領域を対象として数多く開講され、受講者数を限った小規模のクラスでおこなわれています。そこには、学生のほとんどが参加し、積極的な学習の場になっています。

経済学部

(1) 経済学部の教育理念

経済学部は大正8（1919）年に創立されて以来、自学自習を旨とする伝統を形成し、多数の優秀な人材を社会に送り出してきました。その教育理念は、真理の探究を通じて、現在の社会が直面している様々な問題の解決を目指し、激動絶え間ない現代社会を平和で調和的な発展に導く人材を育成することです。そのために、専門的知識を得させることだけでなく、学生の自主的な学問への取り組みを尊重して、柔軟な思考力と豊かな人間性を涵養することを目指しています。経済学は効率と合理性の価値を教える学問ですが、しかしその価値は同時に人間的価値、地球社会の繁栄、人びとが協力し合う社会と両立しなければなりません。しかも、社会の諸問題は複雑高度化していますから、確かな専門的基礎知識の教育も重要です。

そのため、経済学部では系統的で多面的なカリキュラムを整備して教育にあたるとともに、演習を重視して個人指導および集団学習を行なっています。また、日本国内に限らない背景をもつ学生を多数受け入れ、国際的視野のもとで教育にあたっています。教育活動の全体を通じて、時代の進展に対応した専門基礎学力を備え、豊かな心情と人間愛、人権および公正の感覚を有する人材の養成に努めます。

(2) 経済学部が望む学生像

経済学部の教員たちは、経済学・経営学の教育は、すぐに役立つ知識を与えることではなく、学問的基礎のうえに柔軟な思考力と創造性を備えさせることだと考えています。そのため、大学において意欲をもって学び、社会に出てからの経済活動においても自分を成長させ続けようとする学生を望みます。経済学部は、これまで、産業・経営・学術・行政などの領域で活躍する人材を多数生み出しました。経済学部は、このような良き伝統を継承し、そこに自分なりの発展を付け加えようと意欲する学生諸君が入学してくることを望んでいます。

なお、経済学部は、平成21年度入試から、高等学校の文系の教育課程に対応した一般学力検査による選抜（190名）だけでなく、理系の教育課程に対応した学力検査による選抜（25名）、論文を重視した選抜（25名）にも定員の一部を割いています。それは、数学などに現れる理科的な才能や読解力と結びついた論文作成に現れる文科的な才能が経済学にむすびつくことを期待しているからです。

(3) 経済学部の教育内容

経済学部は、経済と経営、経済学と経営学の相互依存関係を重視して、平成21年度から経済学科と経営学科の2学科を経済経営学科1学科に統合しました。学科による区別のない1学部1学科の体制のもとで、「理論・歴史コース」「政策コース」「マネジメントコース」「ファイナンス・会計コース」という4つのコースが示されていて、そのガイドにしたがって専門科目を履修することによって、コースそれぞれの特性に応じた専門化がはかれるようになっていきます。1学年は前期と後期の2セメスターにわかれ、1セメスターにわたり毎週1回の授業を履修して試験に合格すれば2単位が得られます。学部科目はすべて選択科目ですが、入門科目、専門基礎科目、専門科目I、専門科目IIと年次配当によって階層化されています。

理系入試と論文入試の変更などの入試改革がおこなわれた平成21年度からは、入学したばかりの学生が、経済学部生としての基礎知識を身につけ、自立した学習力をつけさせるための「入門演習」を開設しました。新入生は最初の学年から、全学共通科目によって語学学習や教養学習をおこなうだけでなく、「入門演習」と9つの入門科目（マイクロ経済学入門、マクロ経済学入門、社会経済学入門、基礎統計学、経済史・思想史入門、現代経済事情、経営学入門、会計学入門、情報処理入門）によって、経済学・経営学の専門学習のための準備をすることになります。2回生になると「専門科目I」の授業群、3回生になると「専門科目II」の授業群が取れるようになります。

3回生以上になると、経済学・経営学の専門科目だけでなく、法学部が提供する法学や政治学の科目もとれるようになります。また、高度な学習を求める学生には、大学院と橋渡しする大学院共通科目も履修できます。

経済学部では伝統的に演習（ゼミナール）制度を重視し、少人数の学生と担当教員による対話を基本にした学習システムが存在します。2年次以降の演習（ゼミナール）は専門演習で、各教員が特定テーマを掲げ毎年各学年10名以内のゼミ生を募集して指導します。ゼミナール参加者は4回生の終わりに卒業論文を提出することができます。ゼミナールは、学生が教員から指導を受けるだけでなく、ゼミ仲間の学生同士の切磋琢磨、上回生や大学院生によるガイドによって、学問的・人間的に成長できる場であり、卒業後にもゼミ単位のネットワークが維持されるのが通例です。

理 学 部

理学部の教育理念

教育目標

- ・ 自然科学の基礎体系を深く習得し、それを創造的に展開する能力の養成
- ・ 個々の知識を総合化し、新たな知的価値を創出する能力の養成

教育の特徴

- ・ 自由な雰囲気の下で学問的創造を何よりも大切に、自律的学修が推奨される学風
- ・ 理学科のみの1学科制
- ・ 緩やかな専門化を経て、研究の最前線へ

望む学生像

- ・ 自由を尊重し、既成の権威や概念を無批判に受け入れない人
- ・ 自ら考え、新しい知を吸収し創造する姿勢を持つ人
- ・ 優れた科学的素養、論理的合理的思考力と語学能力を擁し、粘り強く問題解決を試みる人

理学は、自然現象を支配する原理や法則を探求する学問であります。その活動の長い歴史を通じて、人類の知的資産としての文化のより深い発展に大きな役割を果たしてきました。また、理学は人類全体の生活の向上と福祉に貢献することを目的としております。

京都大学理学部は、自由な雰囲気の下で学問的創造を何よりも大切にしてきました。この気風が、新しい学問

分野の創造に重要な役割を果たしてきました。その一端は、卒業生の中から3名のノーベル賞受賞者と2名のフィールズ賞受賞者を出したことから窺えます。この学風を継承しつつ、京都大学理学部は広く開かれた教育・研究機関として発展しています。

京都大学理学部は、上に掲げた教育理念を実現するために、理学科のみの1学科制をとっています。それは、学生諸君が自分に最も適切な専門分野を、自分自身の学修を通して見い出せるよう、専門化を緩やかに進めることが出来るためです。このために、学問分野の有機的な関連が分かるよう分野横断的講義が用意されています。その一方で自律的学修の姿勢を養うため、少人数対話型教育が充実されていると共に、学生による自主ゼミ等の勉学活動を積極的に支援する体制が整えられています。そして、相応しい分野を見出した人が、フィールド実習や実験教育により、学問に対する情熱を沸き立たせられるようカリキュラムが工夫されております。このようにして、学生諸君が自ら体系的な基礎学力と技術を習得しつつ、学年の進行とともにその専門化の程度を進め、最終的にはその研究分野の最前線に接することを目指します。

このように組まれたカリキュラムによる修学により、自己の世界を広げ、自己の相対化ができ、自然に対して謙虚な探求の態度を常に維持できる存在となる基盤を獲得させます。卒業後は、その基盤に立って、研究者として、あるいは責任ある職業人として活躍し、新たな知的価値を創出することを目指しております。

理学部の概要

明治30年に京都帝国大学理工科大学の中核として創設されて以来、現在まで一貫して、出来るだけ視野の広い教育を授け、自由にして独創性に富む気風を育てることを理想としています。

本学部は全体で理学科1学科の構成で、多岐にわたる研究教育が行われています。志願者が、将来専攻する分野を出願時に決定することは難しいと思われまますので、入学後、各人が学びながら最適な道を探して、専門化を徐々に進めていくことを期待しています。理学部の科目は一般教育科目、専門基礎科目、専門科目の三つに分類されています。4年間の学修期間のうち1・2年次で主として一般教育科目と専門基礎科目を広く履修します。専門基礎科目の中には、理学部における専門分野及び関連する学際的領域の研究の最先端や将来の展望について分かりやすく解説するオムニバス形式の講義も用意されています。

3・4年次においては主として専門科目を履修します。2年次の終わりに数理科学系、物理科学系、地球惑星科学系、化学系、生物科学系の五つの系のいずれかひとつに登録して専門化を進めます。ひとつの専門分野とその関連分野を重点的に学習し、最終的にはその研究の一端に触れることができることを目指しています。

4年次の学修科目の卒業研究は系毎に、数学講究（数学）、物理科学課題研究（物理学、宇宙物理学）、地球惑星科学課題研究（地球物理学、地質学・鉱物学）、化学課題研究（化学）と生物科学課題研究（動物学、植物学、生物物理学）があります。これらは特定のテーマを通じて各専門分野の研究に触れる極めて重要な科目であり、少なくとも一つのテーマを選択して履修しなければなりません。

研究者的な資質を育む教育理念に明らかなように、卒業後大学院に進学する者が全体の5分の4以上に達し、博士の学位取得者は毎年100人を超えます。大学卒業後、民間企業等に就職し専門的・技術的職業に従事する者は全体の10分の1程度です。

◎ 各系の概要

数理科学系

京都大学理学部における数学の教育課程は、理学部学生全体を対象にするもの、数学を必要とする専門へ進むようとする学生のためのもの、主に数学を学習する数理科学系学生を主対象にするものの三つに大別されます。

1年次で学ぶ数学は高等学校の数学の発展ですが、より幅広く、深く、厳密になっています。全学共通科目では「微分積分学A」、「微分積分学B」、「線形代数学A」、「線形代数学B」と、理学部科目である「線型代数学演習A、B」があり、毎年70%以上の学生が履修しています。このうち「線型代数学演習A、B」は理学部だけにある科目で、理学部の教室で開講されています。

2年次前期に配当されている「微分積分学統論A」、「線形代数学統論」、「集合と位相」、「数学基礎演習I」は、将来数学を必要とする学生向けであり、特に「微分積分学統論A」は、物理科学系の学生にとって必須

のもので、2年次後期からは数理科学系を志望する学生、数学が必要で数学に興味を持っている学生向けの科目が中心になります。「代数学入門」、「幾何学入門」、「微分積分学統論B」、「関数論」とこれらの演習である「数学基礎演習II」があります。

3年次では数理科学系の学生を主な対象として、代数学、幾何学、解析学の各分野で相当専門的な講義と演習が用意されています。3年次までのカリキュラムを消化すれば、知識としての数学の基礎付けは出来るものと考えられます。

4年次では卒業研究科目である「数学講究」を中心として学習することになります。各講究は数名単位のセミナー形式で行われ、数理科学系の学生は数学講究のどれかに所属し、教員の個人指導によって、数学の何たるかを学ぶことになります。

上に挙げた「配当」というのは、あくまで標準であり、3年次で学部教育課程を修了してしまう学生もいます。実際、3年次修了で大学院へ進学する学生も珍しくありません。卒業生の大部分は大学院へ進学しますが、この傾向は今後ますます強くなるものと考えられます。

物理科学系

物理科学系は、物理学と宇宙物理学の専門分野に大きく二つに分かれます。そして物理学の専門分野は物性物理の分野と原子核・素粒子・宇宙の物理の分野とに更に分けられます。

金属、半導体、磁性体、超伝導体等の固体をはじめ、液体、流体、プラズマ、ソフトマター、生体にいたる物質の多彩な姿は原子分子の集合体が示す種々な相です。様々な条件の下でそれらを制御し、それらの性質の解明をめざす物性物理の分野は、現代文明を支える最も基礎的な学問分野の一つといえます。そこではミクロの世界を探索するための高度な実験手段や種々の数理的方法の適用開発を通して物質の新しい様相が次々に明らかにされつつあります。また、レーザー等により高精度に制御された原子や極低温下における原子は量子力学が支配する世界であり、そこで織り成す種々な現象は現代物理学の宝庫です。更に、非平衡条件下における自己組織化現象の解明等は生命科学ともつながる学際的の分野を構成しています。

原子核・素粒子・宇宙の物理の分野では、原子よりも小さい極微の物質世界についての様々な現象や法則を研究するとともに、そのような極微の世界についての知識に基づいて、宇宙という極大の世界の構造や現象を研究しています。理論的な研究とともに、原子核・素粒子の極微世界の研究では加速器等を用いて、また宇宙の物理の研究では宇宙放射線の観測を行うなどの実験的研究が行われます。実験的研究の多くは巨大科学となっていますが、学部教育ではその基本を理解し基礎技術を身につけます。

宇宙物理学の分野では、太陽、太陽系、恒星、星間空間、銀河系、系外銀河から宇宙の大規模構造にわたるまで、様々な階層の天体の観測とそれに関する理論の研究を行っています。宇宙物理学の分野の特徴である個々の天体現象の解明とともに、宇宙を支配する法則や宇宙論の研究も行われています。

3年次に入ると、講義等の他に、課題演習、4年次では課題研究（卒業研究）があります。これは上記の分野から代表的なテーマを選んで、教員・学生がいくつかの小グループを作り、セミナー・観測・計算等を織りまぜて実習形式の教育を行うものです。課題演習では研究の先端を意識した基礎的テーマの学習を、課題研究では学生個人が研究そのものに部分的に触れることを目指しています。

地球惑星科学系

この学系には、地球物理学分野と地質学鉱物学分野があります。地球物理学分野では、固体地球物理学として、地球の形状・重力や水準の測定・地殻の変動などを調べる測地学、地表面下の構造や第四紀の地殻運動などを明らかにする活構造学、地震波の観測や解析、地震の発生機構や地球の内部構造を調べる地震学があります。水圏地球物理学として、陸水と海洋の運動・それらの関連などを解明する、陸水物理学や海洋物理学があり、大気圏地球物理学としては、大気の大循環を把握し、その数値計算やその力学を解き明かす気象学、長期間の気候変動や気候システムを解明する物理気候学があります。また、地球・惑星の電磁氣的性質、超高層大気・磁気圏・惑星間空間の構造と変動を調べる地球電磁気学・太陽惑星系物理学があります。地質学鉱物学分野では、1) 地球や隕石を構成する物質の物質科学的研究、2) 地殻の造構運動と地球のより深部での過程との関連、3) 地球表層部での

生物圏とそれをとりまく水圏・気圏・宇宙環境の相互作用の歴史などを主なテーマとした教育と研究を行っています。

両分野とも2年次後期から徐々に専門化するような幅広いカリキュラムが組まれており、授業以外にも野外での調査実習や、各種の実験機器や計算機を用いた室内実験を経験しながら、やがて4年次では具体的なテーマについて卒業研究が行えるようになっていきます。このような教育や研究を通じて、地球や地球外の惑星などの生成・進化の過程を生き生きと感ずることのできる人材の育成を目指しています。

化学系

現在、化学は、「物質の状態、性質及びその変化」の研究という共通点で結ばれた、多様性に富む物質科学の一分野を形成しています。いいかえると、化学は、原子、分子、生命から宇宙に至る、この自然界に存在するあらゆる物質をその研究対象とする学問分野です。そのため、化学系を専攻することは、物理科学系、地球惑星科学系、生物科学系と複合する領域を含む、広範囲にわたる学問分野を専攻することを意味します。このことを踏まえて、この系では広い視野をもって、物質科学の基礎となる知識を身につけさせることを、最優先の目標として学部教育を行っています。したがって、化学系を専攻する上で、他の系と異なる大きな特徴は、理論から実験のコースまでを含む物質科学の幅広い学習により、将来、どのような関連分野の研究を行う際にも望ましい、バランスのとれた基礎学力を身につけることができる点にあります。

具体的には、まず3年次で主として基礎的な科目群を履修します。この科目群は物質科学における基本的知識の修得と、実践を通じてのその本質の理解という2点を考慮し、量子化学、物理化学、無機化学、分析化学、有機化学、生物化学の各科目と、それらの演習、実験のコース（コンピューターの演習を含む）から構成されています。また基礎的な科目群とは別に、理論・物理化学、無機・物性化学、有機化学、生化学・分子生物学などのさまざまな分野にわたる、アドバンストコースとしての専門科目群が用意されています。3年次から4年次にかけ、各人の研究分野への興味に応じ、これらの専門科目を複数選択、履修し、基礎科目群の履修と並行してゆるやかに専門化を進めます。さらに、4年次では理論系や実験系の研究室の一つに所属し、少人数でスタッフの直接の指導のもと、実験などを通じて物質科学における思考や研究の方法を学び、先端の研究に触れられるよう配慮されています。

生物科学系

生物科学は、生命現象を様々な角度から研究し、理解しようとする学問体系です。生物科学系には動物学、植物学、生物物理学の3つの専門分野があり、そうした広範な学問体系を理解しやすいように教育的配慮がなされています。

動物学では、動物系統学、動物行動学、動物生態学、発生生物学、放射線生物学の他に、人類の起源と進化と多様性に関する人類学の講義が行われています。植物学では、植物系統分類学、植物生理学、植物分子生物学、植物分子遺伝学などの講義が行われています。また、講義内容の理解を助けるために講義に沿った実習があります。さらに、臨海実習・野外実習などがあり、フィールドに出て実際の生物に触れながら学べるように配慮されています。生物物理学は、核酸やタンパク質や脂質などの分子の構造と機能及び細胞の構造と機能をもとに生命現象を理解しようとするもので、そのために分子生物学、分子遺伝学、構造生物学、細胞生物学、分子情報学などの講義があります。また、脳・神経系のはたらきを分子・細胞レベルで理解するための講義もあります。

このように専門課程では、さまざまな分野をカバーするように講義や実習が用意されているので、各人の興味に応じていろいろな分野の講義を受けることができます。また、4年次のために各人の興味に応じて25の研究グループの中から一つを選ぶ生物科学課題研究があり、各学生が研究室に配属されます。教員や大学院生の直接の指導のもとに、生物科学の実験を通して研究を体験しながら生物科学の理解を一層深めることができます。

生物科学系では、各人の興味に応じた適度な専門化と、また同時に専門分野にとらわれない、幅広い知識と能力を持った人材の育成を目標にした教育を行っています。

医学部

医学部が望む学生像

京都大学医学部は21世紀の医学・医療の発展を担い、人類の福祉に貢献することを自らの使命と考え、この理想を追求する学生を求めています。医学には大きく分けて、基礎医学および臨床医学の研究に携わる分野、多様な疾患に悩む患者の医療に携わる分野、さらに環境・福祉・予防など、広く地球的な視点から人々の健康増進に関わる社会医学分野があります。

医学は生命科学の中心的分野の一つです。医学研究は生命の不思議を解き明かし、その結果知り得た生命の営みの原理に基づき、なぜ病気が起こるかを解明しようとするものです。さらにこの病因解明に基づき、新たな診断法や治療法、およびその予防法の開発に努力を傾けます。このような医学研究の遂行には、真理を追求するための強い好奇心と未知への挑戦心、不屈の精神と忍耐力などが必要です。

医療の原点は「人を愛する」ことにあります。それ故、医療に携わる者には、感性豊かな人間性や人間そのものに対する共感と深い洞察力、および人々の健康を増進し、病める者を救おうという強い意志と情熱が必要です。また現代の医療は多様な職種の専門家との連帯あるいは共同作業を要することから、医師には円滑に医療を遂行するための指導力と大きな包容力、ならびに厳しい倫理観が求められます。さらに、医療の進歩と発展に寄与するためには、強い向上心と探求心を持ち続けることのできる人材が求められます。

社会医学は、単に一人ひとりの患者ではなく、我が国あるいは世界の大きな集団を対象として、人々の健康増進を追求する分野です。さらに、このような問題解決のために行政的、あるいは啓発的活動も行う必要があります。このような社会的な要因による医学的問題解決のためには、秀でた社会性と優れた行政的活動能力、および幅広い国際性が要求されます。したがって、この分野では広い視野を持ち、人間社会全体に目を向ける感性、柔軟な思考力と豊かな人間性を持つ人材が望まれます。

京都大学は学生の自主性、自己啓発を教育の主眼として、個性豊かな創造性の涵養を目指しているため、自ら学習課題を発掘し解決しようとする主体性を持った人材を求めています。さらに、京都大学医学部は多様な能力と幅広い教育背景を持ち、医学・医療の分野で指導的立場に立ちうる人材を集めたいと考えています。このような背景に鑑み、医学に従事する職業的な制約による適性を重視し、高い知的能力のみならず、人間性を含めた総合的に卓越した能力・人格を有する学生の入学を切望するものであります。

◎ 医学科

医学部・医学科の教育のあらまし

本学科の修業年限は6年です。入学当初より、医療サービスに対する関心をはぐくむ取組に参加するとともに、研究に対する関心を育てる取組も提示され、さまざまな体験を通じて将来のキャリアを見すえた視点を構築します。また、最初の2年間に、全学共通科目の履修が求められ、各学部の枠を越えて開講される授業に参加することができます。全学共通科目の中でも、修得すべき単位数が定められているほか、将来の必要性を考慮して重点的に履修を求められる科目があります。所定の単位を修得すると3回生への進学が認められます。

専門基礎科目は、レベル教科として2回生から履修がはじまります。レベル教科とは、生体の構成要素を分子、細胞、組織などのレベルに分け、体系的に学習するものです。レベル教科を修得したのち、専門臨床科目としてシステム教科を履修します。システム教科とは、人体を呼吸器系、循環器系、消化器系、血液免疫系、内分泌・代謝系、脳神経系、運動骨格系、皮膚結合組織系、感覚器系、泌尿器・腎臓系、生殖系などといったシステムに分け、それぞれの病態に関して臨床的な視点から学ぶものです。このような枠組みに入りにくい教科も、有機的にレベル、システム教科の中に組み入れて、専門科目としてのカリキュラムを充実させています。健康と社会・環境との関係を公衆衛生の視点から学ぶ社会健康医学系の学習もその一つです。4回生の時点で、これらの科目の履修がすべて修了し、臨床入門実習を履修して医療系大学間共用試験に合格した学生は、臨床実習に入ることができます。5回生春から臨床実習が行われ、診療の現場において実地の修練が行われます。本学は、各地の医療を担うレベルの高い医療機関と人事交流があり、こうした医療機関の指導医のもとでも、附属病院のみならず、第一線の医療を学びます。6回生の秋学期からはグループ学習と最終卒業試験にあてられ、6年間のまとめが、

学生たちの自律的な学習でおこなわれます。

本学科では、自分自身の将来のキャリアを形成するため、継続的な取組を行っています。実際の医療サービスがどのように行われているか、その際のチーム医療の重要性を入学後、早い時期から体験することは、自分自身の医療専門職としての将来を見つめる上で重要であり、医療者としての適性をみつけ素養をつけることを学生に求めています。たとえば、他の学科の学生と外来患者の支援サービスを行ったり、病棟で患者と対話したりすることを行います。また、医療サービスに関する体験だけでなく、研究に対する関心を開拓する取組も学生に提供されます。1回生からラボ・ローテーションで研究室訪問を行うことができます。学生時代から継続的に研究する学生も少なくなく、各研究室は広く門戸を開いています。こうした積み重ねを経て、4回生のマイコースプログラムでは、主として研究面で学生の自発的な取組を実践するカリキュラムがもうけられています。研究への志向が明確な学生に対しては6年の卒業を待たずに、大学院に進学するMD・PhDコースも設けられています。このコースは、6年制医学部に大学院博士課程（3・4年）を組み込み、卒業時には医学士（MD）に加えて医学博士（PhD）を得ることができるものです。

卒業後は、専攻する進路によって異なりますが、多くの卒業生が医師免許取得後、2年間の卒後臨床研修を受けています。また、臨床医として修練を積む過程で、研究に携わることは水準の高い医師に求められており、一定の臨床経験の後、大学院に進学する卒業生が数多くいます。また基礎医学を専攻し研究を志して、卒業後ただちに大学院に進学する卒業生もいます。このように本学は、学部学生のための教育機関というだけでなく、大学院大学としての機能も充実しており、大学院学生として水準の高い研究、教育の機会をえることができます。本学の多くの卒業生が医師、研究者、教育者、あるいは医療行政官として我が国の医学界で指導的な役割をはたしています。

◎ 人間健康科学科

医学部・人間健康科学科の教育のあらまし

人間健康科学科は看護学専攻、検査技術科学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻の4専攻より構成されています。修業年限は4年でその間に全学共通科目、専門基礎科目、専門科目を履修します。いずれの専攻も初めの2年間は主に全学共通科目、即ち自然科学系、人文科学系、外国語科目を履修し幅広い教養を身に付けます。全学共通科目と平行して2回生後期までに4専攻とも専門基礎科目を履修します。専門基礎科目は医療専門職が共通して学ぶべき医学・医療領域のコアカリキュラムと位置付けられる重要なものです。2回生後期より以下に説明してあるような各専攻別の専門科目の履修が始まります。3回生には病院などにおける臨床実習、そして4回生では卒業研究などを行います。指定された単位を修得し卒業したものにはそれぞれ看護師、保健師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士などの国家試験受験資格が与えられます。

将来優れた医療専門職となることを目標とした教育システムを準備しています。まず入学当初より専門科目の一部を履修する教育方法、いわゆるアーリー・エクスポージャーを行います。また自学自習を基本とした問題解決型授業を行います。さらに4専攻の学生が合同で学ぶことにより、将来のチーム医療に臨む基盤を育てます。

以上のような教育を効果的に行うために教育設備を充実し、学生と教員の交流を高めるような様々なアイデアを用意しています。

看護学専攻

看護学は、個人、家族、地域を対象に、健康の回復・保持・増進、疾病の予防に至るあらゆる健康レベルの人々を支援する実践の科学です。看護を志す者は、生命に対する尊厳を基盤とした深い人間愛と高い倫理性を備え、対象となる人々の生きる力を引き出し、自立を助け、身体的・精神的・社会的側面から全人的なケアを行うことのできる能力が必要です。

そこで看護学専攻では、このような健康科学に関連した4つの講座を設け、看護学の基礎教育を行います。まず基礎看護学講座では、人間が基本的にもっている健康に対する営みやその対処行動についてのエビデンスの探求や評価手法を開発し、看護学全体の基礎となる知識や支援の方法を教授します。また臨床看護学講座では、主と

して成人期にある人々が遭遇する心身の健康問題を、急性期から慢性に至る各疾患経過から捉えてアセスメントし、人々が健康を維持・回復できるように支援する知識と技術を教授します。

家族看護学講座では、女性・母性・小児及びその家族が遭遇する健康問題や、夫婦が自立して次世代を生み育て、健全な家族を形成できるように支援する知識と技術を教授します。

地域・老年看護学講座では、個人や家族はもちろんのこと、地域が抱える様々な健康問題や、少子高齢社会において看護職として専門的な機能を発揮できるような知識と技術を教授します。

各講座では、以上のような学部教育を踏まえ、将来、専門看護師として高度な医療や健康問題に対応することができるように、大学院の教育も視野に入れた教育を行います。

検査技術科学専攻

検査技術科学は、医療現場での診断・治療・予防に不可欠な科学であり、今後も新しい検査技術・医療機器の開発、医療情報の統合に大きく貢献することが期待されています。そのためには幅広い基礎知識、応用力、探求心はもちろんのこと医療人にふさわしい人間性が求められます。そこで、本専攻では3つの講座を設け、前記のような人材育成を目指した教育を行います。

基礎生体病態情報解析学講座では、生体からの情報を抽出し、遺伝子、分子レベルから、細胞、組織レベルにわたる基礎的な生理的並びに病理的情報を分析する方法を教授します。

臨床生体病態情報解析学講座では、移植・再生医療、遺伝子治療を始めとする先端科学の臨床への展開を支援する臨床検査のエキスペートとして必要な理論や技術について教授します。

情報理工医学講座では、ITを駆使した画像診断機器を十分活用する上で、その基本となる基礎科学、工学的理論について教授します。さらに、院内、地域の医療情報を医師とともに管理、解析、統合していく方法論について教授します。

以上のように検査技術科学専攻では、新しい時代の流れに対応できる知識と高度な技術を持った臨床検査技師を育成するとともに、この分野の教育・研究の発展を担う人材を育成することを基本とした教育を行います。

理学療法学専攻

理学療法学は、日常生活に必要な基本的動作能力を維持、改善し、社会生活に適応するために必要な援助技術や治療技術を活用する実践科学といえます。

運動機能開発学講座では、疾病や外傷などによって障害をきたした人に対する運動機能の改善や障害の軽減、運動機能に関係する呼吸・循環・代謝の改善に関する教育・研究を行います。

また健康運動機能学講座では、健康生活に必要な運動機能について系統的に分析し、その定量的評価法を確立するとともに、高齢化に付随する諸問題に対する予防的、維持的方法について教育・研究を行います。

卒業後は、医療現場だけでなく地域医療や福祉の現場などにおいて医療・保健・福祉専門職として幅広くパランスの取れた理学療法士として活躍する事が期待されます。

作業療法学専攻

作業療法学では、豊かな人間性と幅広い視野を持ち、トータルなリハビリテーションマネジメントができる高度な援助技術を身につけ、急性期から維持期まで一貫した作業療法の実践と教育・研究を担う人材を養うため各講座に於いて以下のような内容で教育に臨みます。

作業機能開発学講座では、身体障害・精神障害・発達障害の領域における作業治療学等を通し、残存機能を最大限に開発する為に必要な作業療法の知識と技術を身につけます。また既存の知識・情報で対応困難な問題点を確認し解決していくことができる思考力が養えるよう教授します。

作業機能適応学講座では、評価学や作業分析学、高次神経機能適応学等を通し、対象者の備えている現存機能を活用し最大限の自律生活が送れるように援助する為に必要な作業療法の知識と技術を身につけます。その援助の効果を常に念頭において臨床に従事する姿勢が養えるよう教授します。

薬 学 部

薬学部が望む学生像

薬学は医薬品の創製、生産、使用等に関する総合科学です。京都大学薬学部においては、科学の基礎体系をより一層深化させ、医療に関わる科学者を目指す人材を求めます。

薬科学科

薬科学科の主たる使命は医薬品の創製に関わる科学者の育成です。自ら考え、探求し、創造する豊かな心を持つ人材が求められます。

薬 学 科

薬学科の主たる使命は最適な薬物治療を実現する科学者の育成です。医療の進歩と発展を担うため、向上心と探求心を持ち続けられる人材が求められます。

薬学部の教育内容

薬科学科

4年制の薬科学科では、薬学の基礎となる自然科学の諸学問（有機化学、物理化学、生物化学等）と薬学固有の学問（医薬品化学、薬理学、薬剤学、衛生薬学等）に関する基礎知識と技術を学び、薬学研究に対する知的好奇心の涵養を通じて、大学院を経て将来研究者その他多様な領域で活躍する社会人となるために必要な基本的素養の向上を目標にします。1年次には全学共通科目での教養教育と薬学部提供の全学共通科目を中心にして、さらに薬学者の社会における貢献を知るための薬学倫理・概論など特色ある科目を学習します。2年次からは専門科目が導入され、新しい演習科目によって自発的に考える学習を行います。3年次には午前中に講義、午後には通年にわたる専門実習を行い、創薬研究のコアとなる知識と技能の基盤を形成します。さらに4年次には研究室配属による特別実習を行い、与えられた研究テーマを遂行することにより研究者としての基本を体得します。

薬 学 科

6年制の薬学科では、医療人に求められる教養教育に加え、薬学の基盤である自然科学各分野と薬学固有の学問に関する知識と技術を網羅的に学び、さらに薬剤師職能の基礎となる臨床薬学知識、職業倫理の涵養を通じて、将来医療の指導者になりうることを目標にします。1年次から3年次までは基本的に薬科学科と同一のカリキュラムによって進行し、薬科学の基礎をしっかりと身につけます。4年次においては医療系科目を中心に履修し、同時に演習や少人数のチュートリアル科目などによって医療薬学を十分に時間を割いて学びます。4年次終了時には共用試験によって実務実習に必要なコアカリキュラムの到達度が判定されます。5、6年次においては、実務実習事前学習、病院実習、薬局実習を行い、医療薬学の技能や態度を十分に磨き上げます。また、研究室において特別実習および演習を行い、与えられた研究テーマを自ら考えながら遂行することにより研究者としての基本を体得します。薬学科卒業生には薬剤師国家試験の受験資格が与えられます。

工 学 部

工学部の理念と歴史

学問の本質は真理の探究です。その中で工学は人類の生活に直接・間接に関与するテーマを扱っています。そのため、地球社会の持続的な発展や文化の創造などの問題についても責任を持って対応しなければならない立場にあります。京都大学工学部では、このような考え方に立って教育・研究を行います。教育にあたっては、しっかりと基礎学力と高度の専門能力、高い倫理性、ならびに豊かな個性を兼ね備えた人材の育成を目標としています。

また、研究においても基礎を重視するという姿勢でのぞんでいます。自然環境と調和のとれた科学技術の発展ということにもつねに注意をはらっています。

ここで京都大学工学部の歴史を少し紹介しておきましょう。京都大学工学部は明治30年（1897）に京都帝国大学理工科大学として土木工学科、機械工学科で出発しました。その翌年には電気工学科、製造化学科および採鉱冶金学科が、また大正9年（1920）には建築学科が開設されました。以来様々な整備拡充が行われ、平成8年（1996）に現在の6学科、すなわち、地球工学科、建築学科、物理工学科、電気電子工学科、情報学科、及び工業化学科に再編されました。

教育方針

京都大学工学部の教育の特徴は、京都大学の伝統である「自由の学風」の下で、先に述べたように「学問の基礎を重視する」ところにあります。「自由の学風」とは、既成概念にとらわれず、物事の本質を自分の目でしっかりと科学的に見るといことです。そこでは、学問に対する厳しさが要求され、それが、「学問の基礎を重視する」ことにつながります。一般的には「工学部は応用を中心とする学部である」と考えられているので、上のように「基礎重視」といいますと、やや異質な印象を持たれるかもしれません。しかし、京都大学工学部では、基礎となる学理をしっかりと学んでおくことが、将来の幅広い応用を可能とするための必須条件であるという信念の下に、この教育方針を貫いています。

教育内容をもう少し詳しく説明しておきます。京都大学工学部へ入学すると、1～2回生で、一般的な教養教育、英語他の外国語教育、理系全般に共通の基礎教育を受けます。また、それぞれの学科・コース特有の専門教育も1回生から始まり、しだいにその重みを増していきます。4回生になると、特別研究という科目で学生1人1人が特定のテーマに取り組みます。特別研究では、学生は希望の研究室に配属され、研究の最先端に接しながら、指導教員・大学院生と一緒に研究が出来るようになっていきます。学部卒業後、大学院へ進学すれば、より高度な専門教育と研究指導を受けられます。これまで、京都大学工学部は、上のような教育を通して、幅広い応用能力、まったく新しい未知なる課題へ敢然と取り組む自主性・創造性、および豊かな教養と厳しい倫理観を備えた卒業生を輩出してきました。

望ましい学生像

このような教育を受けていただくために、次のような入学者を求めています。

- (1) 高等学校での学習内容をよく理解して、工学部での基礎学理の教育を受けるのに十分な能力を有している人。
- (2) 既成概念にとらわれず、自分自身の目でしっかりと物事を確かめ、それを理解しようとする人。
- (3) 創造的に新しい世界を開拓しようとする意欲とバイタリティーに満ちた人。

以下、各学科の内容を、詳しく紹介します。

◎ 地球工学科

20世紀には、科学技術が急速に発達し、先進諸国において豊かな社会が実現する一方、資源の大量消費や環境汚染問題が顕在化してきました。また、開発途上国における人口の急増と貧困問題も残されたままになっています。地球工学は、このような現状のもとで21世紀における地球規模での人類の持続可能な発展を目的とする学問分野です。このため、地球工学科では、地球空間における生活と産業のための社会基盤整備、地下資源の探査と

開発、人の健康の保護と生活や環境、資源の保全などについての基礎理論とその工学的応用について総合的な視点から教育と研究を行います。

地球工学科は、日本で最も充実した大学院の教育研究組織で構成されています。すなわち工学研究科の社会基盤工学専攻、都市社会工学専攻及び都市環境工学専攻と連携するとともに、工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター、エネルギー科学研究科のエネルギー応用科学専攻及びエネルギー社会・環境科学専攻、地球環境学舎環境マネジメント専攻、情報学研究科社会情報学専攻や経営管理大学院とも連携しています。また、防災研究所、原子炉実験所、環境保全センターなどの協力の下に、教育・研究を進める体制となっています。

地球工学科が対象とする科学技術の領域はきわめて多岐にわたります。具体的には、①全地球・地域現象の観測・解析とその情報分析、②文明の基盤となる都市・地域施設の構築、③新資源・エネルギー創出と資源循環システム、④人間の健康・安全・衛生と生活環境改善及び環境リスク軽減、⑤地球環境構造と保全、⑥生活基盤の防災・安全・信頼性、⑦風土・文化を考慮した美しく快適な都市や国土の創出、⑧交通・運輸・通信システム、⑨総合計画・管理・情報処理・人工知能、⑩新材料応用・新技術開発などがあります。

これらの広い領域にわたる総合的な理解なくして、地球空間の健全な開発と保全はありえません。そこで地球工学科では、まず基礎的な共通科目を学習した後、それぞれが興味の深い分野へとコースを選択し、志望に応じた多様な選択が行えるようカリキュラムを用意しています。これによって地球工学科に関連する科学技術分野を総合的に理解し得る基礎学力を養うとともに、それぞれの興味ある特定テーマを深く学習することを可能にし、広範囲の分野を取り扱うことの出来る多様な研究者・技術者を生み出すことができます。具体的には、1, 2回生において数学、物理、化学、生物、地球科学、語学及び人文社会等の広範な基礎科目の他に、地球工学総論、基礎環境工学Ⅰ、社会基盤デザイン及び資源エネルギー論などを学習し、基礎学力を養います。3回生では土木工学コース、資源工学コース及び環境工学コースのいずれかに進み、各自の志望に応じた科目を自由に選択学習します。さらに、4回生で選択科目に加えて特定のテーマについて特別研究を行った後、大多数が大学院修士課程に進学して専門的な能力を高めることとなります。

◎ 建築学科

人間の生活環境を構成し、安全で健康にして快適な生活を発展させるよりどころとなる建築は、複雑な技術の総合の上に行われる創造的な努力によって作りだされます。他の工学分野と同様に、人間生活に必要なものを生産する技術であります。作りだされるもの―すなわち建築―は他と比較にならないほど人間生活のあらゆる面に密接かつ深く係わっており、最もヒューマンな技術といえます。このような建築の特色から、教科課程も自然科学、人文科学、社会科学の広い分野にまたがっており、卒業後の進路も建築・構造・環境の設計及び施工に従事する建築家及び技術者、行政的な指導・監督に当たる建築行政担当者、各種開発事業に携わるプランナーなど実に多様です。したがって建築学科では、「単に自然科学の面に才能をもつ学生だけでなく、人文科学、社会科学、さらには芸術にも深い関心をもつ学生をもひとしく歓迎します。」

建築学科の教科課程・研究は対象領域や研究手法の観点から、計画系、構造系、環境系及びこれらの系と横断的に関係する人間生活環境や建築保全再生を扱う系に大別されます。

計画系では、豊かな人間生活の基礎となる住宅から種々の建築物及びそれらの集合体である地域・都市空間までを対象とし、空間の形成原理を解明し、空間構成計画、設計、都市計画、建築生産などの方法や、美的観点からも優れた建築物を設計する方法について教育研究を行っています。これにより、歴史的考究に基づく洞察力、現状認識のための調査分析能力、空間を構成するための造形能力などが養われます。

構造系では、建築物を地震や台風などの自然の力から守り、その建物としての寿命を全うするための構造工学・構造技術を教育研究しています。構造技術の発達は従来経験しなかった超高層建築や全天候野球場などの大規模構造の建設を可能にしてきました。さらに、合理的な設計理論、構造法、施工法の展開が望まれていますので、入学者は自然科学を基礎とした広範な能力を発揮することができます。

環境系では、熱・空気・光・音などの物理的環境要素と人間への生理・心理的影響を総合的に評価した環境計画、それを安全で最適に実現する設備計画について教育・研究しています。

人間生活環境や建築保全再生を扱う系では、前記3つの系と協力して生活環境システムを最適に設計する方法や

技術を教育し、さらに、IT技術や保全再生技術などを駆使して新しい時代の建築設計及びその人間生活との関連性について教育・研究を行います。

建築家・建築技術者となるには、これらの諸領域について技術とその基礎となる原理を深く修得していくことが望まれるため、比較的基礎的な科目から次第に専門分野に至るように、また、各自の特性を活かした選択が可能なように履修課程が構成されています。さらに高度に専門的な学術知識を修得し研究能力を養うために、建築学科では大多数の学生が大学院修士課程に進学します。

◎ 物理工学科

科学の世紀と呼ばれた20世紀から新しい世紀を迎え、これまでの科学・技術を更に発展させ、同時に地球環境・資源・エネルギーなどについての困難な課題を克服して人びとに明るい未来をもたらすために、科学・技術に寄せられた期待は大きなものがあります。物理工学科では、次世代の科学・技術に対するこのような期待に応えることのできる人材を育成することを目指して、工学の広い分野とその科学的基礎について教育を行います。

この物理工学科の教育は大学院の組織によって支えられています。関連する大学院専攻は、工学研究科の機械理工学専攻、マイクロエンジニアリング専攻、航空宇宙工学専攻、原子核工学専攻、材料工学専攻、及びエネルギー科学研究科と情報学研究科に属するいくつかの専攻です。これらの専攻は、学内のエネルギー理工学研究所、原子炉実験所、再生医科学研究所、及び工学研究科附属量子理工学研究実験センターなどと協力して、物理工学に関連するそれぞれの分野で、基礎から応用にいたる最先端の研究と、それに基づく大学院での教育を行っています。

大学における教育は、それによって学生が専門知識を得るばかりでなく、より広く、人間、社会、歴史を深く理解し、創造的な思考方法を身につけることをも目的とします。物理工学科に入学した学生は、高度一般教育として、広い範囲にわたる人文・社会科学系科目、外国語科目などを学び、同時に数学、物理学などの基礎科目を学びます。1回生における専門科目としては、「物理工学総論」が用意されています。ここでは「物理工学」の全体像と個別の学科目の位置づけがなされます。2回生以降では、一般教育科目、基礎科目の学修を進めるとともに、基礎的な専門科目として、固体、流体の力学や物性、熱力学、電磁気学、原子物理学の初歩を学びます。学生は機械システム学、材料科学、エネルギー理工学のエネルギー応用工学と原子核工学、宇宙基礎工学の5つのコース・サブコースに分かれ、将来の専攻分野に応じた教育を受けます。

機械システム学コースでは、材料、熱、流体の力学や物性、その基礎となる量子・統計物理、並びに機械システムの解析と設計・製造・制御について、材料科学コースでは、材料の物性と機能、材料設計、更に材料プロセッシングについて、エネルギー応用工学サブコースでは、種々のエネルギーの変換・利用技術、ミクロな立場からの物質の性質・変換・創製などについて、原子核工学サブコースでは、ミクロな世界の物理学をもとに核エネルギー・量子ビームなどについて、また、宇宙基礎工学コースでは航空宇宙工学に関連する基礎学問分野について、それぞれ系統的な基礎教育を行い、工学のあらゆる分野で活躍できる人材を育成することを目指します。いずれのコース・サブコースにおいても、学部卒業のために必要な特別研究は、上記の大学院を構成する専攻の講座の研究室において行います。

卒業後は、多くの学生が大学院に進学します。上記大学院の修士課程学生の定員は物理工学科の学生定員の約8割です。大学院の各専攻は上記の各コース・サブコースと一対一に対応するのではなく、学生はいずれの専攻にも進学できます。

物理工学科卒業生と上記の大学院専攻修了者には、物理工学のあらゆる関連分野で指導的な研究者・技術者として活躍する道が開かれています。社会生活における工学の役割は加速的に重要となるとともに、人類の将来に対して大きな責任を持ちつつあり、したがって工学技術者、研究者は専門領域における高度な知識と能力を持つだけでなく、幅広い素養ならびに人類社会に対する高い責任感と倫理感を持つことが望まれます。先に述べたように、物理工学科では、物理工学関連分野においてこのような能力を持つ技術者、研究者を育成するために、様々な教育プログラムを用意しています。したがって、そのような能力を持つ技術者、研究者になりたいという強い意欲と、提供される教育プログラムを理解し、自分のものとしてゆくの十分に資質を持っていることを、入学してくる学生諸君に求めます。

◎ 電気電子工学科

電気・電子工学は現代のあらゆる産業や社会生活の基盤として欠くことのできない科学技術となっています。例えば、大規模集積回路（超LSI）や光・半導体デバイスを用いた各種の電子・情報・通信システム、ホームエレクトロニクス機器、ロボット・自動車・通信衛星・医療福祉機器等に搭載されている人工知能や制御システムなどはその代表としてあげられます。また、現代社会の主要なエネルギー源である電力の高効率で安定な供給に関する技術とともに、あらゆる電気・電子応用機器の高効率化や人間社会・地球環境との調和のための技術がますます重要になってきています。

電気電子工学科では、(1)半導体や誘電体、磁性体、超伝導体などの電子材料に関する基礎科学や、ナノテクを応用した新しい光・電子デバイスの創製や集積技術、(2)それらを応用した計測・制御や情報・通信・メディア・ネットワークに関するハードウェアとソフトウェアの技術、(3)電気エネルギーの生成と伝送、利用にかかわる個々の要素やシステムに関する理論と実用技術、という3つの幅広い学術分野にわたって、基礎から応用までの総合的な教育を行っています。実際には、工学研究科の電気工学専攻・電子工学専攻、情報学研究科の通信情報システム専攻ほかの3専攻、エネルギー科学研究科のいくつかの専攻、ならびに関連する研究所やセンターなどに所属する教員が、相互に協力しながらそれぞれの専門に応じて教育を担当しています。

科学技術としての電気電子工学はきわめて広範にかつ学際的に発展し続けており、研究者や技術者としては広い領域にわたる総合的な知識や理解とともに、高度な専門性や独創性も求められています。そこで、電気電子工学科では、まず基礎的な共通科目を学習した後、学生個人がその志望に応じた多様な選択が行えるようにカリキュラムが作られています。これによって、電気電子工学に関連する科学技術分野を総合的に理解しうる基礎学力を養うとともに、興味のあるテーマについて深く学習することを可能とし、広い視野と創造的な専門能力を兼ね備えた人材を生み出すことを意図しています。

具体的には、1, 2回生の時に、数学、物理学などの全学共通の基礎科目のほかに、電気電子回路、電磁気学、情報通信や計算機工学の基礎、プログラミング技術、物性物理・電子材料・デバイスの基礎などを学習し、また初歩的な電気電子工学実験を行って基礎学力を養います。3回生ではより進んだ電気電子工学実験を行うとともに、各自の志望に応じた科目を自由に選択学習します。4回生では選択科目に加えて特別研究を行い、専門的・総合的な能力を高めます。さらに、全学年を通して外国語や人文・社会科学等の教養科目を履修し、知識と思考の幅を広げます。

本学科では、自然現象や科学技術、その人間生活との関わりなどに対して広い関心と旺盛な探究心をもつとともに、電気電子工学関連の学術分野へ強い興味を有し、専門教育を受けるのに十分な基礎学力と論理的思考力を備えた創造性豊かな入学者を求めています。

卒業後は大多数の学生が大学院に進学しますが、工学研究科、情報学研究科、エネルギー科学研究科のいずれにも進学できます。また、電気電子工学科の卒業生と大学院の修了者に対する社会のニーズはきわめて大きく、エネルギー・情報化社会を支えるあらゆる分野で、指導的な研究者・技術者として活躍することが期待されています。

◎ 情報学科

現在の高度情報化社会を支える様々なシステムは、大規模かつ複雑化し、工学の各専門分野が融合した形態をとることが普通になっています。このような情勢に対処するために、現代科学技術の基盤をなしている“情報”とは何かを究明し、その役割を明らかにする必要があります。また、対象となるシステム全体を横断的にとらえ、問題解決のための手法を探究する“数理的思考”が不可欠なものとなっています。

そこで、情報学科では、グローバル化や科学技術の進展など社会の激しい変化に対応し得る幅広い知識をもった人材の育成を目指した総合的な教育と研究を行っています。特に、情報学の理論と実践とを有機的に結合し、数学と物理学を基礎として未知の問題のもつ数理的構造を解明し実際問題に応用できる能力、先端的な技術を用いた高度情報システムを設計・活用できる能力を養うことを目標に据えています。

そのため、本学科では、工学部の基礎学理の教育を十分に理解できる能力を備えることはもちろん、既成概念にとらわれず、自分自身の目でしっかり物事を確かめ理解する力を備え、新しい世界を切り拓く意欲に満ちた創

造性に富む人を求めています。

そして、そのようなバイタリティーをもつ人材が、情報学に関する幅広く深い教養と総合的な判断力を身に付けることができるように、基礎から応用に至るカリキュラム体系を編成し、大学院情報学研究科（知能情報学専攻、社会情報学専攻、複雑系科学専攻、数理工学専攻、システム科学専攻、通信情報システム専攻）の教員が教育・研究を担当しています。なお、計算機科学および数理工学はその性格上、すべての学問領域とつながりを持つものですから、諸分野についての広い視野の育成を重視した講義・実験・演習・セミナーなどを提供しています。また、本学科の学生は、原則として1回生修了時点で、計算機科学コース（定員50名）と数理工学コース（定員40名）に分かれ、専門教育を受けることになります。

数理工学コースでは、数理科学の根幹としての数学と物理学、システム工学の基本的分野である制御理論、数理的手法の応用をはかるオペレーションズリサーチなどを中心に、システム理論、最適化理論、離散数学などの諸分野の話題も加えて修得します。もちろん、これらの成果を具体的に適用するために必要となる計算機・情報・通信の授業科目も含まれています。数理工学は、工学における基礎と柔軟な発想を重視しつつ、総合的工学としての役割を担う学問ですから、その目的を達成するために必要な学力を涵養することを目指しています。

計算機科学コースでは、情報とは何かを究明することを目標に、その処理・伝達・蓄積に関し教育・研究を行います。すなわち、情報と通信の理論、計算の理論、論理回路設計、計算アルゴリズムの設計と解析、コンピュータハードウェア・ソフトウェアの構成原理と各種技法、コンピュータによる言語・音声・画像の情報処理、人工知能・知識工学、コンピュータネットワーク、情報システムとその構築法、メディア処理と各種応用など広範囲にわたる先端技術について学修させ、情報化社会の中核となる技術者・研究者を養成します。

◎ 工業化学科

社会の発展に伴い、産業の基盤や先端科学を支える多種多様な新しい物質や材料の開発への要請が強くなっています。また、人類が将来にわたって豊かな生活を送るためには、地球環境、資源、エネルギーなどの問題を解決しなければなりません。これには、単に物質を作る技術から、それを構成する分子の生い立ちや性質を調べ、それに基づいて物質の機能を探ることが必要です。このように、新しい化学への期待が極めて大きくなっています。また、人類がおかれている環境を考慮したうえで、いかに有用な性質・機能を持った物質や材料を生産するかという事も重要な課題です。

これらは、互いに有機的に関連しており、狭い専門分野の知識、技術のみでは対処できません。このような課題を解決できる人材を養成するために、学部では化学の基礎理論のみならず物理学、生物学などとの境界領域にある化学及びそれと関連する工学の基礎知識を広い範囲で修得させることを目指しています。教育・研究は大学院（材料化学専攻、物質エネルギー化学専攻、分子工学専攻、高分子化学専攻、合成・生物化学専攻、化学工学専攻）の教員が担当しています。また、学内の化学研究所、原子炉実験所、再生医科学研究所、エネルギー科学研究科、地球環境学堂、産官学連携センター、福井謙一記念研究センター、物質-細胞統合システム拠点などとも連携しています。

工業化学科では、上記の目的を達成するため、十分な基礎学力を有し、物事を論理的に考察でき、さらに自ら問題を考えて解決する能力をもつ、意欲に満ちた学生を求めています。入学した学生には、化学に関連した広い分野にわたる基礎学力の養成を重視した授業科目を用意しており、工業化学科の全教員が協力して教育に当たっています。第1学年では化学・物理学・数学等に関する基礎的な能力を養うとともに、語学や人文・社会系の科目を履修し京都大学の学生として必要な基礎的素養を身につけます。なお基礎物理化学と基礎有機化学については工業化学科の教員が教育に当たります。第2学年から工業化学科としての専門課程が始まり、物理化学・有機化学・無機化学・化学プロセス工学等について、工業化学科の教員による基礎的かつ高レベルの教育を受けます。

1年半の共通のカリキュラムに続いて、第2年次の後期からおよそ2:3:1の定員比率で創成化学コース、工業基礎化学コース、化学プロセス工学コースに分かれ、将来の専門分野に応じた教育を受けます。創成化学コースでは、物質の合成、構造、機能、性質を支配する基礎原理を学び、化学的な探求手法を修得します。これらを通して将来、人間社会に貢献する新しい機能や性質をもつ材料創成のための化学を専門分野にすることを目指します。工業基礎化学コースでは物質の反応や化学的性質を支配する基礎原理と実験手法を習得することによって、将来、

分子の概念に基づいた反応・物性の理解，新規化合物の合成，エネルギー関連化学，生物化学など多様な化学の専門分野に展開することを目指します。化学プロセス工学コースでは，化学の基礎科目に加えて，物理，数学，コンピューターサイエンスなどの工学基礎を修得し，将来は，分子レベルから，化学プロセス，さらには地球環境にいたるまでのあらゆるシステムにおけるエネルギーと物質の変換・移動過程を定量的に取り扱う工学の分野を専門とすることを目指しています。なお，教育効果を高めるため，すべてのコースにわたって共通のカリキュラムも準備されていて，幅広い専門知識を修得できるようになっています。第4年次で学生は研究室に所属して専門分野の卒業研究を行い，研究者・技術者としての高度な知識を修得するとともに基礎的訓練を受けます。

卒業後は，大多数が大学院へ進学して，さらに専門的能力を高めていきます。大学院の専攻は上記の学部コースと直結するものではなく，いずれの専攻も受験することができるようになっています。工業化学科の卒業生と大学院の修了者は，化学工業はもとより，電気，電子，情報，食品，医薬，機械など，ほとんどあらゆる分野で必要とされており，社会の期待には極めて大きいものがあります。

農 学 部

農学は，生命・食料・環境という私たちに最も身近な問題を取り扱います。生物学のみならず，化学，物理学，社会科学等の多様な基礎知識を必要とするいろいろな学問分野から成り立っており，その総合的な視点は，現代の人類が抱える，様々な要素が複雑に絡み合った課題に立ち向かっていく上できわめて重要です。

農学部は，その教育を通じて，農学とそれに関連する学識とともに高い倫理性を身につけた社会人を育てることを目的としています。さらにそのような人材に（1）人類が直面する課題に対して，幅広い視野から科学的解決法を構想する能力（2）農林水産業及び食品・生命科学関連産業の意義と重要性を理解し，その発展に寄与する能力（3）生命・食料・環境に関わる世界水準の自然科学・社会科学研究を理解する能力を備えさせることをめざしています。

この目的を実現するため，学部には，資源生物科学科，応用生命科学科，地域環境工学科，食料・環境経済学科，森林科学科，食品生物科学科の6学科が置かれ，それぞれの学科が，独自の理念と教育方針に沿ったきめ細やかな少人数教育を行っています。低学年では各学科の基礎科目に加えて，農学全般の社会的意義や役割を学びます。高学年ではより高度な学科専門科目を学び，豊富な実験・実習を通じて理解が深められます。また学科間のカリキュラムネットワークも配慮され，幅広い関連知識の修得を可能にしています。

卒業後の進路としては，8割程度が大学院に進学しますが，就職者の多くは官庁，国公立の試験研究機関，また，企業では化学・食品等の製造業，バイオテクノロジー関係の産業あるいは機械メーカー，建設業，商社・金融・保険等広い分野に進出しています。

◎ 資源生物科学科

(1) 資源生物科学科が望む学生像

「農業，畜産業および水産業が抱える諸問題や生物学的諸現象に広く関心を持ち，勉学意欲に富み，問題に対して幅広い視点から論理的に解決案を見い出していく能力を有する人」を求めます。したがって，英語などの基礎科目について十分な素養を備えているとともに，とりわけ生物学をはじめとする理科の科目に関して十分な学力を有していることが望まれます。

(2) 資源生物科学科の紹介

人類は，陸地や海洋に生息する植物や動物，微生物など多様な生物を貴重な資源として利用し，また長い年月をかけてそれらを改良し育ててきました。資源生物科学科は，このような食料や生活資材となる生物の生命のしくみを明らかにし，その潜在能力を引き出して安定生産を図り，同時にそれらを有効に利用していくための基礎知識や応用技術について，広い視野に立って教育・研究を行っています。

これからの農業にとっては、安全な食料を持続的に供給するため、それぞれの環境に調和した生産技術や防御技術を開発するとともに、不良環境・病害虫などに抵抗力のある作物や消費者にも利益のある新しい農作物を作り出し、利用していくことがますます重要な課題となっています。このことは陸上の植物に限ったことではなく、家畜や資源動物、海洋の魚介類、藻類、微生物などについてもいえることであり、これらの生物の生理生態的特徴や遺伝のメカニズムを明らかにすることがより大切です。また、これらの分野での研究成果は、絶滅が危惧される野生生物の保護や医学・健康科学分野への貢献も期待されています。

このように本学科は、多様な研究を行っている31の研究分野から成る農学部の基幹学科であり、生物や農業、環境に幅広い興味と深い関心を持っている学生諸君の要望に応えるべく、基礎から応用にわたり体系的に学べるようきめの細かいカリキュラムを用意しています。

◎ 応用生命科学科

(1) 応用生命科学科が望む学生像

生命科学に強い関心を持ち、生命現象や生物の機能を化学的なアプローチによって解明・活用することに興味がある人、「健康」に関心を持ち食料生産と環境保全について興味がある人を求めます。多くの分野にまたがる領域にも飛び込んでいける人が望まれます。

(2) 応用生命科学科の紹介

21世紀は生物産業の時代といわれ、環境、食糧、エネルギー、保健福祉を軸に発展すると考えられています。その中心的技術は、生物の機能をより高度に活用する手段であるバイオテクノロジーです。

本学科では農業生産、発酵・食品・化学工業、環境保全などの現場から生じる様々な問題を生命現象の原理に基づいて解明し、その成果を新しいバイオテクノロジーとして展開できるよう、広範囲の学問領域について基礎・専門教育を行います。

教育では、4年一貫の教育カリキュラムを遂行しています。1・2年次には、各人は本学科で学ぶべき目標を設定できるよう、応用生命科学科全般の学問領域を平易に解説する入門的科目とともに、共通基礎として物理化学、有機化学、生化学を受講します。3・4年次では、動物、植物、微生物を対象とした基礎から応用にわたる広い範囲の学問分野を体系的に受講し、それぞれの理論を体験的に修得できるよう周到に準備された実験・実習を受けます。さらに4年次では、各人は各研究室に所属し、新しい研究課題への取組みをとおして、創造的研究の遂行方法と考え方を学びます。

これらのカリキュラムをとおして、社会の要請に応え、活躍できる自立したバイオテクノロジーの研究者・技術者を養成しています。このような目標を定めた教育を受け止めることのできる明確で強い動機と高い能力を有する人材を求めています。

◎ 地域環境工学科

(1) 地域環境工学科が望む学生像

農業・農村問題や環境問題、人類への食料供給問題に強い関心を持ち、これらの問題解決に向けた物理学、数学を基礎とした工学的・技術的な方法論に関し勉学を志す人材を求めます。ただし、農業生産と密接な関係があることから、生物学や生命科学などにも強い関心を持つ学生が望まれます。

(2) 地域環境工学科の紹介

「地域」とは「農業・農村地域」を指します。農業・農村が持続的に発展するためには、自然環境との調和に配慮しながら、地域における重要な環境基盤である土地や水の生産環境、農村地域における生活環境を適切に保全・整備することが基本的に重要なこととなります。また、「地域は地球の細胞」であり、地域を健全な状態に整え維持することが、地球環境の保全にとっても重要です。このような基盤が整えられてはじめて環境と調和した食料生産活動やさまざまな社会活動が可能となります。こういったことを具体化するためには、自然科学から社会科学に及ぶさまざまな分野を包摂する学際的な基礎科学の上に、応用科学である工学や技術学を展開するこ

とがきわめて重要となります。

本学科では、基礎知識の教授とともに、演習と実習を通して、数理的、工学的発想に基づいた工学、技術学としての地域環境工学の教育を行います。そして、地域や地球の環境と調和のとれた食料生産基盤や生活環境の保全・整備を目的として農業・農村社会の基盤形成に寄与する人材の育成を図っています。

なお、このような目的のためには全地球的な活動が求められます。そこで、本学科では国内はもとより国際的にも活躍できる技術者や研究者の養成にも力を注いでいます。

◎ 食料・環境経済学科

(1) 食料・環境経済学科が望む学生像

食料、環境、農林水産業等において生ずる様々な社会・経済問題に対して強い関心を持ち、幅広い観点から自身の力で論理的・実証的に問題の解決に向かって努力する人材を求めます。理科系科目に興味を持ちつつ、経済学を基本としながらも、経営学、社会学、歴史学など人文・社会科学を積極的に勉強したい学生を望みます。

(2) 食料・環境経済学科の紹介

本学科は、今人類が直面している難問のなかでも、私たちの生活に最も関連深い食料と環境をめぐる諸問題に対して、経済学・経営学をはじめ社会学・歴史学など人文・社会科学を総動員し、問題の性格とそれらが社会・経済システムに占める位置を明らかにするとともに、解決のための諸条件を明らかにすることを課題にしています。他学科のほとんどが自然科学的な研究手法をとるなかで、唯一本学科のみが人文・社会科学的な研究手法を用いています。

農林水産業は、主として非生物材料と人工的な施設に依拠する無機的な工業技術とは異なり、各地域の自然生態系と社会のあり方を反映し、地域的個性のうえに環境保全的で持続的な展開をめざさねばなりません。食料問題も環境問題も人間の創り出した社会・経済システムの産物であり、本学科はその解決を課題とすると同時に、他の学科で行われる自然科学的・技術学的諸研究の成果を積極的に吸収し、それらが現実社会に適切に受容されるための諸条件を探ることや、これらを農学論として総括し、21世紀にふさわしい新しい農学のパラダイムを発信していくことも目標にしています。

以上のような共通の目標を基盤にして、本学科は具体的な課題と手法で区別される8つの分野（研究室）で構成されています。大別すれば、主にマイクロ領域を対象とする農業組織経営学分野と経営情報会計学分野、主にマクロ領域を対象とする地域環境経済学、食料・環境政策学、森林・林業政策学、国際農村発展論の諸分野、主に歴史・哲学領域を対象とする比較農史学及び農学原論の諸分野です。

本学科は、講義とともに特に少人数の演習による教育及び農林水産業の現場に直接ふれる調査・見学・実習を重視しています。また、これに関連して調査分析手法や情報処理の教育をも取り入れています。1年次に食料・環境経済学実習、2年次に調査研究方法実習を行っています。さらに、3年次の後期から分野の演習に参加し、1年半をかけてじっくりと卒業論文作成にとり組みます。

◎ 森林科学科

(1) 森林科学科が望む学生像

人類の健康で快適な生活には、食料とともに環境の良い生活空間が必須であります。森林科学科では身近な生活空間から地球規模の環境問題までを視野に入れて、森林の保全と育成、木材などの再生資源の有効利用、森林・農村・都市の良好な関係などの課題に積極的に取り組む人を望みます。

(2) 森林科学科の紹介

森林は、地球の陸地面積の27%を占め、人類の生活を種々の面で支え、関わってきました。貴重な森林資源を将来にわたって持続的に利用しながら、地域の自然災害の発生や地球環境の劣化を招かないようにするにはどうしたらよいかは21世紀の世界共通の課題です。森林科学科は森林、樹木をキーワードに、それらに関わるほとんど全ての項目を広くカバーした研究、教育を行っています。大きくは、次のように分類されます。

1. 森林とそこに生息する動植物を含む生態系とその機能を、生物多様性、土壌資源と物質循環の変動を含めて自然科学的に理解する。
2. 森林から生産されるバイオマス資源を木材、繊維（細胞）、分子など、マクロからナノ・分子レベルで利用する方法を、生物学、物理学、化学などの手法を用いて開発する。住宅の設計、住宅部材の製造・管理なども含まれます。
3. 庭園や公園から、都市や里山、国土など様々なスケールの緑地のデザインと計画を行う。また、森林と人間の係わり合いを経済、社会だけでなく心や文化の面からも検討し、望ましい関係を探る。エコツーリズム、森林経営、山村問題などが含まれます。
4. 森林の水・物質循環に基づく環境形成作用や山地斜面、山地河川での土砂の移動、樹木、森林の土砂災害防止機能を解明する。

分野によって、フィールド調査、室内での試験、電子顕微鏡での観察、フィールドや室内での実験、コンピューターシミュレーション、衛星データを利用したリモートセンシング等の中から適切な手法を選んで問題の解決に当たります。フィールド調査は、北海道から沖縄までの国内だけでなく、熱帯雨林、亜寒帯の森林から砂漠にまで広がっています。

◎ 食品生物科学科

(1) 食品生物科学科が望む学生像

食に関わる幅広い問題に関心を持つとともに、生物学、生化学、有機化学、物理化学など、生命科学に関わる基礎学問を学ぶ意欲を持ち、これらの学問的背景のもとに、食品生物科学の学理を修得し、将来、食品科学および健康科学に関わる創造的な研究ならびに開発・生産活動を目指す、積極的な人を求めています。

(2) 食品生物科学科の紹介

食は人間の生活の基本を占める重要な問題です。食品は、農水産物等の一次生産物を、人間が食べられる形で提供するものであり、食品生物科学科は食品の創成基盤を広く学術的に取り扱う学科です。

食品に関わる広範な問題を根源から見据え、適切に対応するためには、食に取り組む新たな学問分野の構築が必要です。本学科は、多様化の一途をたどる食品に関する基礎的な知識・技術、考え方を教授し、次代の先端的食品科学・技術に対応できる幅広い素養を有する人材を育成するために設立されました。

その基本理念として次のようなものが挙げられます。

1. 食品の研究を通じて生物・生命を理解する。
2. 生物・人間を研究することによって、人間にとってよりよい食品を創成する。
3. 食品の効率的な生産に寄与する技術を蓄積する。

これらの諸理念が相補しあって、新規の食品科学を形成していくものであることは言うまでもありません。

この目的に沿って、食品に関連する生物学、有機化学、物理学、生化学を基礎から教育し、続いて食品に関して、分子レベルから個体レベルにわたる専門教育を行います。

【学生募集要項等の請求方法】

本学の学生募集要項等の請求方法には、以下の4つの方法があります。

①大学のホームページから直接請求する方法

詳しくは、京都大学ホームページ (<http://www.kyoto-u.ac.jp>) にアクセスしてください。

総合人間学部案内、工学部案内、農学部案内につきましては、各学部のホームページにて、電子媒体での公開を行っています。

②テレメール（インターネット・自動応答電話）で請求する方法

学生募集要項は9月から案内開始、12月上旬から送付。



テレメール

インターネットの場合		電話の場合	
携帯電話・パソコンとも共通アドレス http://telemail.jp		IP 電話	050-2015-0555
QRコード ※対応する携帯電話 で読み取れます。		一般 電話	06-6222-0102

○IP電話：一般電話回線からの通話料金は日本全国3分毎に約11円です。

資料名	資料請求番号	送料
学生募集要項	584622	210円
学生募集要項+大学案内	544612	290円
大学案内	564602	290円
総合人間学部案内	564622	140円
工学部案内	544622	210円
農学部案内	564732	210円

○送料は、お届けした資料に同封されている支払方法に従いお支払いください。

③郵便局から請求する方法（10月から案内開始：12月上旬から送付）

郵便局や高等学校等に10月から設置されます「国公立大学・短期大学及び通信教育課程、大学校募集要項（願書）請求申込書」（郵便局用願書請求カタログ）に必要事項を記入し、最寄りの郵便局に送料と払込手数料120円を添えて申し込んでください。

郵便局・テレメールでの請求についての問い合わせ先：テレメールカスタマーセンター 050-2015-5050（9:30～18:00）

④大学の窓口等でも配布しています（12月上旬より）

学生部入試企画課：9:00～17:00（月～金曜日〔祝休日を除く〕）

京都大学インフォメーションセンター（本部構内正門横）：土・日・祝休日を含む24時間



再生紙を使用しています。